

神様にヘラクレスの十二の試練を貰って転生した主人公がぼくらの  
世界で十二回死ぬ話

ルシエド

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

十二の試練は、主人公に蘇生魔術を十一回重ね掛けた命を与える。

乗機のスリットは十二。主人公は、十二度死ぬ。

逃れようもなく死ぬ。

ぼくらの世界は、特別な人間に対しても等しく残酷だった。

の ら く ぼ

--	--	--	--

58 39 15 1

目次

ぼ

「我輩は真実を求めろ」

「こんな姿になつたのも、こんな運命を仕組んだ『神』とやらの正体を、知りたかつたからだ」

「たとえ、邪悪な愉快犯だったとしてもな」

「君に力をくれた『神様』とやらは、どんな奴だったのだ？」

#### ○ルール1

この星の人間は、ロボットの操縦者となる。

操縦者はロボットを操り、不定期に現れる『敵』のロボットを倒さなければならぬ。

『敵』は一度の戦闘につき一体出現する。

『敵』は操縦者の操るロボットでなければ、特例を除き倒せない。

『敵』はその体の中に球状の弱点を持ち、それを潰すことで倒せる。

#### ○ルール2

ロボットは、念じることで動かせる。

子供だから動かせないということはない。

動かし方はどのロボットも同じだが、ロボットには性能差や個性が存在する。

#### ○ルール3

『敵』は平行世界の地球である。

戦闘に勝利した場合、『敵』の地球を含む宇宙は消滅する。

戦闘に敗北した場合、操縦者の地球を含む宇宙は消滅する。

戦闘開始から48時間が経過すると、両方の宇宙が消滅する。

この戦いの目的は、こうして宇宙の可能性を淘汰することである。

#### ○ルール4

球状の弱点は、『敵』の宇宙人がロボットを操るコクピットである。

戦闘の勝利条件は、厳密にはこの地球の人間が、『敵』の操縦者を殺

すことである。

規定の勝利回数を達成することで、この戦いは終了する。  
それぞれの地球に、それぞれの規定の勝利回数が存在する。

○ルール5

ロボットは操縦者の生命力を糧として動く。

そのため、操縦者は戦闘終了後に死亡する。

○ルール6

選べる選択肢は三つ。

「戦闘に勝利し、地球を守るため死ぬか。

「戦闘に敗北し、地球を守れずに死ぬか。

「戦闘から逃げ、両の地球と共に死ぬか。」

橘たちばな 雄都おとは、四機目のロボットのコクピットを踏み潰す。

これで四回目。

平行世界の地球人を皆殺しにして、宇宙を淘汰するのも四回目。

踏み潰したコクピットの中に、十人くらいの人間が居た……：よう  
な、気がした。

『よくやった、オト』

「一人殺せば殺人者、百万人殺せば英雄……：百億人つつ殺してるオレ  
は、じゃあなんなんスカね」

『オト』

「分かってるっスよ、コエムシ。このくらいでどうにかなるヤワな精  
神はしてないっス」

オトと呼ばれた少年は、周りに誰も居ないコクピットの中で一  
人、安堵の息を吐く。

”コエムシ”と呼ばれた者は厳密には人間ではない。

だから、一人だ。

『この地球の戦いは、我輩の地球での戦いより厳しいように思える。無茶は……』

「その気持ちだけで十分つすよ。ここで無茶しなくて、いつするんすか」

オトは巨大ロボットの足元に、コエムシと共にワープする。

すると、ロボットはまばたきの間に消えていった。

『帰るぞ、オト』

「へいへい……オレは帰る家があるけれど、コエムシは家に帰りたくならないんすか？」

『思わんでもない。だが、我輩の地球の命運をかけた戦いは既に終わった。』

我輩の仲間は我輩の地球を守った。

我輩は姿を変え、我輩達の機体と共に、この地球の戦士達の手助けをするために来た。

ならば今はそれに全力を尽くすのみ。家に帰るのは、お前達の地球を守りきつてからだ』

「次の地球の戦士を支えるサポーター、コエムシ、ね……オレとしては助かるけど」

『素直に頼ればいいのだ』

夜の街を歩きながら、橘雄都はひとりぼっちの家に向かう。

それなりに資産を持っていた独身の母親という、厄介事の匂いしかない親から雄都は生まれ、母親は雄都が生まれてすぐに病死した。

雄都はその後色々となり、中学二年生になった今も、一人暮らしを続けている。

コエムシが来てからは、一人と一匹だ。

「それにしても、あの機体強いっすね」

『“ヘラクレス”のことか。ああ、あれは強い。』

何せ既に我輩達の地球を守り、勝ち抜いた実績があるからな。

名前は勝手に我輩達が付けた者だが、我輩達の時のコエムシも強いと言っていた』

「そこだけはまあ、運が良かったっす」

二人は橘宅に着き、今のソファアームにぐでつと寝っ転がる。

『本当に運が良いのはこの世界そのものだ。』

お前のような”何度でも生き返れる”人間が操縦者になった世界など、いくつもないだろう』

「……」

この世界を守り、別の世界を滅ぼす戦い。

最初の一回はこのコエムシの仲間が”ヘラクレス”に乗って戦い、勝利してくれた。

その後四回、雄都は”ヘラクレス”に乗って地球を守った。

一度乗れば死ぬはずのロボットに乗って、だ。

『昨日は興奮してすまなかった。我輩のせいで話を中断させてしまったな。』

だが、お前の力が”神”から貰った物なのだと、想像もしていなかったものでな……』

「オレが勝手に神って呼んでるだけっすよ」

『構わん。』

お前に”十二個の命”を与えたのも。

この戦いを始め、続けさせ、平行世界の数を削っているのも。

どちらも同じ”神”であると我輩は考えている。教えて欲しい』

そこには、一つのカラクリがあった。

『お前が死に、生まれ変わった時のことを』

彼は一度人生を生き、死後に生まれ変わり、”橘 雄都”という名でこの世界に生を受けた。

転生した人間、と言い換えてもいい。

その過程で『何か』を見て、触れ、力を得た。その『何か』を、雄都は神と呼んでいる。

「あれは……何て言えばいいんスカね……人の形をした光の渦、と言うべきか」

死んだ後、生まれ変わる前に見た光。雄都はその姿をまだ、目に

焼き付けている。

「たぶん現象とか、そういうのに近いと思うっス」

『現象……仮説の一つではあったが、それが一番最悪なのだがな』

「あれを蛇が見たら、きつと蛇に見えるっス。」

虫だったら、きつと光の虫に見えてたと思うっス。

おそらくオレ<sup>ひと</sup>だから、人に見えてたんじやないかな……」

『鏡に近い、のか?』

「いや、違うと思うっス。」

なんとなくだけど、化学反応とか、そういうのに近いような……」

雄都は神を理屈や理論で語れない。

感覚でしか語れない。

”神”は、そういうものだったから。

「例えば、死んで生まれ変わったのがオレ以外の人だった場合……」

傲慢な人には、謙虚な神に。

卑屈な人には、尊大な神に。

女好きの人なら、女の神に。

格闘家なら、剛健な神に見えたんじやないかな、と思うっス」

『神は見る者によって姿を変える……いや、違うな。』

接触した者によって、千差万別の反応を返す、ということか』

「あ、それしっくり来るっスね。」

オレが神様に触れて、オレにこの力を与えるって形で反応が返って

来た、みたいなの？」

『うむ』

雄都の感覚的な言葉を聞き、コエムシはそれを正答に近い形に組み

立てていく。

コエムシの正答を聞き、雄都は感覚の記憶にしっくり来る答えを導

き出していく。

「オレはそれで、この力を得たんスね」

生まれ変わった雄都は神から12個の命を与えられており、11回  
までなら死んでも復活することが可能で、死の原因に耐性がつくとい  
う特性があった。



生前は無かったもので、今の彼を支えている力だ。

死に方の問題なのか、命を吸うロボット側の問題なのか、戦闘毎に与えられる死に耐性が付かなかったことは大問題だったが、解決できる問題でもない。

『今のお前なら、漢字二文字でその神を表せるはずだ』

「漢字二文字？ えー、うーん……」

『これに関して、我輩の星の論文で見たことがある。』

直接見たお前ならば、我輩と同じ答えが出るはずだ。

同時に言うぞ。3、2、1……』

突然の無茶振りに、雄都は慌てて思考を回転させる。

そして考える間をくれないコエムシに、何も考えず感覚的な答えを返した。

『「根源」』

そして、雄都とコエムシの声は被る。

「あれ？ 本当に答えが同じになったっスね」

『我輩の世界では、それは「<sup>から</sup>」とも呼称されていた』

「から？」

『人の想いに応じ、人に全知と全能を与えるこの世全ての根源、と聞く。』

枝状分岐字端末点の根本にあたる部分……

まあよく分からんものだ。

人の一部だったものだとも、それを加工したものだとも、そうでないとも言われていた』

コエムシはこことは別の、全ての戦いが終わった地球の出身だ。

その世界で見た論文の記憶を参考に、コエムシは推測を組み立てていく。

神様、根源の渦、「<sup>から</sup>」。

人がそれに望めばなんだって形になるであろう、雄都が人の形の光に見えたそれ。

その存在を推測の軸に置いてみれば、色々と見えて来るものがある。

『仮定は出来た』

「マジっスか？」

『おそらくはどこかの誰かが触れたのだ。』

過去は分からん。未来かもしれない。

世界に屈折した想いを抱いた誰かが、根源と呼ばれたりもする何か

……”「<sup>から</sup>”にな』

「で、このロボットの戦いが始まったと？」

『“ここまで”人が作った印象の強い”ものだど、どうしてもその可能性を追わざるを得んな』

「オレの力は……死に際に死にたくないとか思ってた記憶あるので、それっスかねえ……」

『推論だ。我輩は全知ではない、あまり信じるなよ』

「でも直接見たオレがじっくり来てるわけでスからね」

コエムシが語る話は、全て根拠も証拠もない推論だ。

しかし直接見て触れた雄都の同意があると、いくらか信憑性が増す。

『お前が”神”と呼び、我輩が”「<sup>から</sup>”と呼ぶもの。』

尋常な手段では辿り着けず、人が恒久的に手にしたままにもできないもの。

それが、平行世界同士を潰し合わせているものと見て間違いあるまい』

「……倒せたりするっスかね？」

『不可能だ。……知りたくもなかった事実ではあるが。』

神とやらが居たなら、一度でいいから殴りたかったのだが』

二人が会話から得たものは、真実に近づいたかもしれないという実感と、途方も無い徒労感。

そして、この戦いをどうにかする方法など無いという、推論だけだった。

五勝目。

橘雄都は危なげなく勝利し、こことは別の地球に生き、こことは別の地球を守ろうとした人間達の詰まったコクピットを握り潰す。

雄都の地球、及び雄都が戦う可能性のある並行世界の地球の人口は、約100億人。

彼は400億人を殺した自覚があり、今また100億人を殺した手応えを感じていた。

「…………ごめんな」

目を瞑り、握った拳を額に当てる雄都。

謝ることが最悪の侮辱になる可能性があるかと分かっているながら、彼は謝らずには居られない。

この機体には命そのものを見る機能があり、それがまた雄都の罪悪感を倍増させていた。

『気に病むなオト。殺さなければ、お前とお前の地球が減びていた』

「…………」

『仕方のない事なのだ。』

この行為を、仕方のない事以外の何かにしないで欲しい。

でなければ…………望まぬまま他の世界を潰している全ての人間が、救われない』

「分かってる…………分かっているさ…………」

何よりお前が救われない、という言葉のコエムシはぐっと飲み込んだ。

その言葉を口にした瞬間に、雄都という人間の中でコエムシが”道理に反してまで雄都を擁護する存在”と定義されてしまい、雄都が本当に救われなくなると分かっていたから。

「あと、七回…………」

雄都は唸るように、小さく低く震えた声で呟く。

「あと、七回敵を倒して……七つの世界を潰して……オレの残る七つの命を使いきって……」

マラソンで苦しい時に、ゴールまでの距離を脳内で計算するように。

この苦しい戦いの終わりまでの、道のりの長さを計算する。

「それで、それで終わる……オレ以外の誰にも、こんな気持ちを味わわせちゃ、いけない……」

雄都が命を一つ使い潰して、守った明日がやって来る。

この世界の多くの者達が、来ることを疑ってもいなかった明日がやって来る。

肉体的には中学二年生の雄都は、戦いの翌日の朝もまた、学校に足を運んでいた。

「おっはよー!」

「おはよーっス」

クラスメイトに挨拶しつつ、雄都は朝のHRが始まるまで机に突っ伏す。

話し相手が居ないぼっちだからではない。

眠かったからでもない。

クラスメイトの話題が一色に染まっている中で、自分の顔を見られなくなかったから。

表情を取り繕う時間を、できる限り短くしたかったからだ。

「あのロボットすごかったねー」

「ねー」

「かつこよかったよなー」

雄都が住んでいる街、雄都が通っている学校は、小さな島の上にある。

近くに本土の大きな港街があるが、基本的に周囲は全て海に囲まれていた。

『敵』との戦いは、基本的に操縦者の居る土地で行われる。

周囲が海で、人口が少ないこの島は、戦いにはもってこいだった。

「あれロボットなの?」

「怪獣かもしれないけど、皆がロボットって言うてる内にロボットって定着した感じ」

「ニユースとかずつとそう言ったもんね」

「ロボットだけど、誰かが乗ってるのか乗ってないのかも気になるわ」  
ヘラクレスと呼ばれた機体が滅法強く、雄都がコエムシに稀代の操縦者と呼ばれるほどに優れていたため、この地球ではいまだに死者が出ていない。

戦闘でロボットの操縦者も死なず、誰も戦闘に巻き込まれていないためだ。

だから子供達は、本当に”他人事”のようにかの戦いを語っている。

「俺らも乗りたいよなあ」

「なあ。敵が来てない時くらい、乗せてくれてもいいのにな」

「ケチなんだよケチ、あのロボットを独り占めしてるんだ」

「へへっ、俺が乗ってたらもつとすごい動きできるぜ！ たぶんな！」  
顔を伏せる雄都は、今の自分がどんな顔をしているのか、よく分かっている。

とても他人に見せられない顔だった。

「知ってるか？ 損害賠償とかなんとかで起訴されるって話」

「え、なにそれ、教えてくれよ」

「ほら、この前戦いで会社が一つ壊れたじゃん？」

「あー」

「で、そこ管理してた社長があロボット達に損害賠償求めて起訴しようとしてんだって」

「バカなのかしら」

ある者は、ヘラクレスを見てロボットではなく怪獣だと思った。

その姿は機械的でありながらも、同時に生物的でもあったから。

ある者は、ヘラクレスを見て、人を守る正義のロボットだと思った。

『敵』がこの地球を攻撃し、その攻撃をヘラクレスが弾き、人を守ったのを見たからだ。

ある者はヘラクレスに敵意や警戒心を持っていた。

俺の会社を壊しやがって、味方であると断定はできない、と利害や安全を考えているからだ。

誰も彼もがそれぞれに、ヘラクレスに対し何かを思っている。

一方的に、自分勝手に、無責任に、何も知らないままに。

(考えるな)

橘雄都は必ず死ぬ。

敵との戦いは十二回、命の数は十二。この戦いが終わると同時に、彼は必ず死ぬ。

必ず死ぬという絶望。

何もせずのんきに生きているだけで、座して明日を手に入れられる人々。

この世界で、戦わずとも明日を生きていける者達への嫉妬。

平行世界を潰し合わせる”神”とやらへの虚しい怒り。

そして、それらのどれよりも大きな『孤独感』。

今の雄都は、それら全てがぐちゃぐちゃに混ざり合った酷い顔をしている。

(考えるな……)

机に突っ伏していないと、周りに当たり散らしてしまいそうで。

(考えるな……！)

気持ちを胸の奥にぐっと押し込んで、あと少しで表情を取り繕える所まで行った、そんな時。

雄都の肩を、誰かが叩く。

彼が寝たふりをしていることを見抜いて、彼に呼びかける。

「や、おはよう」

その少女の声が、雄都の中の醜い気持ちを、なんとか抑え込んでくれた。

雄都は表情を取り繕って顔を上げ、話しかけてきた少女に対応する。

「ふっふーん、今日は元気無さそうね、オト」

「そんなことないっすよ。これまたもう元気バリバリで！」

少女の名は日ノ本<sup>ひのもと</sup>尊<sup>みこと</sup>。

長い黒髪に白い肌、容姿端麗で深窓の令嬢という理想像をそのままにしたような外見。

明るく元気で活動的、間違っていると見れば大人相手でも突っかかっていく熱い性格。

月のような美しさに太陽の激烈さを加えた少女、と近所でも噂になる美少女であった。

「第一、ミコと比べたら誰だって元気無いつスよ」

「そうかしら？」

雄都の話し方はどこか軽薄な印象を受けるが、尊の話し方には品と、芯がある。

「ねえ、昨日の夜九時ぐらい、どこに居たの？」

「家に居たつスよ。ちよつと早めに寝ちやってて、避難遅れちまつたつス」

「ふっふーん……」

「なんスか？」

「いやいや、聞いただけよん」

嘘だった。

昨日の夜九時頃、雄都はヘラクレスの中に居た。

尊は雄都が避難していないことに気付いて、心配したんだと言いたげな素振りを見せる。

「さ、笑いなさい。さんはいー！」

「えっ……、ここうつスカね」

そして気持ち落ち込んでるように見えた雄都に、笑うよう促す。

不器用に笑う雄都を見て、尊はその十倍は魅力的な笑顔で応えた。

「それでよし」

雄都は人並みに譲れないもの、信じるもの、といったものを持ってはいない。

だが、そんな彼にも信じているものはある。

彼は他人を笑顔にできる人間こそ、本当に価値のある人間なのだと、信じている。

「笑いなさい。辛い時も、楽しい時も。」

笑えないような気持ちも、笑って無理やり吹き飛ばしなさい。その方がきつといいことあるわ」

日ノ本尊は、橘雄都が考える、生きる価値のある人間の筆頭だった。「なんスか、それ」

尊の言葉に根拠はない。理論もない。証明もない。それでも、そんな言葉に救われている少年が居た。

時は待たない。

敵も待つてはくれない。

神には待つ理由がない。

時は流れ、六体目の敵が雄都の前に現れる。

『行けるか?』

「よーよーっス。ま、そこで気楽に見てるといっつスよ、コエムシ」

橘雄都に救いはない。

コエムシは雄都に救いがあつて欲しいと思つているが、今の彼のどこに救いがあるものか。

その胸に去来するのは、拭い去れない死の恐怖と、絶対的な孤独感。彼は一人だ。

一人で十二回死んでいく。

この世界を守りながら、この世界の誰も死なせずに、死んでいく。仲間が居れば、何か違つたのだろうか。

『この苦しみは自分一人だけが感じているものじゃない』という、小さな救いはあつたのだろうか。その孤独感だけでも、どこかに行つてくれたのだろうか。

仲間の死が、彼に何かを残すこともあつたのだろうか。

(他の誰にやれと言えばいい? 12人に死んでくれ、と頼むのか



……？

受けてくれるわけがない！ 騙すしかない……

騙したら、騙された人はどうなった!? どんな絶望をする!? それも、12人……!」

どんなに悩もうとももう遅い。

別のパイロットを探したとしても、雄都の命を使い尽くすまで、ヘラクレスは別の人間の命を吸うことはない。

雄都が死の運命を回避しなかったのなら、最初にそうすべきだったのだ。

最初に、自分の代わりに12人ほど”殺せば”よかった。

けれど、彼はそうしなかった。

彼は一人で死んでいく道を選んだ。選んでしまった。

（——オレが、オレが、12の命を貰って、この世界に生まれて来た意味は——!）

敵の装甲を引き剥がし、雄都が操作するヘラクレスが、損壊させた敵のコクピットを掴み出す。

握り潰す直前、割れた敵のコクピットの中から、「助けて」という声が聞こえた気がした。

小さな女の子の声だった、気がした。

く

橘雄都が、橘雄都として生まれ直す前の話。  
彼の最初の人生の話。

「その薄汚い手をどけろ」

彼は路地裏に連れ込まれた女性を助けるため、女性を無理矢理に路地裏に連れ込んだ暴漢共に向かって、力強くそう言った。

「もう大丈夫。安心していいっすよ」

彼はボクシングを習っていた男だった。

彼は人を守ることに憧れていた男だった。

彼の目の前には助けを求める女性、女性を害そうとする男達。  
鍛えた拳を人のために振るわずして、男は男と名乗れない。

「男が拳を鍛えるのは、こういう時に人を守るためっすからね！」  
そうして彼は、全てを失った。

雄都の操作するヘラクレスが、七体目の敵に突きの連打を浴びせていく。

敵はそこそこに頑丈な装甲を持っていたが、ヘラクレスの攻撃力の前には無力であり、一撃ごとに装甲に穴が開いていく。

必然、敵は必死にガードするしかない。

雄都が一撃の破壊力ではなく、手数を重視していることにも気付かず。

「そこ、コクピットっすね」

人は無意識に”攻撃されてはいけない場所”を意識する。

人間であれば顔がそうだろう。顔を攻撃する素振りを見せれば、人は反射的に顔を庇う。

このロボットによる戦闘において、それはコクピットの他にはな

い。

コクピットに攻撃が飛んで来た場合と、コクピット以外に攻撃が飛んで来た場合に、人が反射的に見せる行動が違うのは当然のこと。

雄都の優れた洞察力は、その微細な動きを見逃さない。

他の人間が見逃すようなものであっても彼は捉えて、そこを潰すために動き出す。

ヘラクレスの腕が下方に振るわれる。

足を折られる、と思った敵がガードを下げた。

そうやってガードを下げて、すかさずヘラクレスは“手を抜いた速度”から加速し、“機体に大きな負荷がかかるくらいの全速”にスイツチ、敵のコクピットがある右胸を貫く。

意図して付けられた攻撃速度の差に、敵は反応すらできずコクピットを潰される。

そうしてまた、一つの世界が消滅した。

「……………ふう」

雄都は目眩がした……ような、気がした。

殺した時に感じる動揺にムラがあったのは、精神的に不安定だったから。最近も殺してもさほど動揺しなくなったのは、殺すのに慣れてきたから。

あまり嬉しくない変化だと、雄都は思う。

『やはり、強いな。この機体もそうだが、お前が強い』

「この機体は子供の癩癩で動かしてもそうそう負けないと思うっすけどね」

『この地球の戦いは敵の機体も十分に強い。常勝の要因は操縦者にある』

ヘラクレスと呼ばれたこの機体は、本当に強かった。

敵の攻撃を受けてもそうそう沈まず、殴れば敵の防御ごと砕き、レーザーなどの補助武装まであった。シンプルに強い、と表現すべきなのかもしれない。

しかしコエムシには、今回の戦いで現れる敵達も、ヘラクレスと同クラスに強いように見えた。

ならば、勝利の理由は操縦者の差にあるのだろう。

「パンピー相手ならオレはまず負けなかつスよ。」

練習キツくてドロップアウトした、雑魚相手にイキがつてる元格闘家なんかにもつスね。

とはいえプロ級の腕があれば普通に負けるつス。勝負勘で今日まで勝つてるようなもんスから」

『……うん?』

「オレ、生前はボクシングやってたこともあるんスよ」

『なるほど、合点がいった。お前の駆け引きと勝負強さのルーツはそこにあつたのか』

「素人は足踏みする。素人は躊躇う。素人は焦る。カモにするのに慣れてれば、楽なもんつス」

生身ならば、彼は素人相手にまず負けない。

ロボットに乗っても、彼は素人相手にまだ一度も負けていない。

「オレは死ぬ直前までヤクザの用心棒してたつス。」

なんで、トーシロをなるべく早く倒すなんてのは、手慣れたもんなんスよ」

『ヤクザの用心棒、だど?』

「夜の街で何も習ってない雑魚、格闘技齧つてただけの雑魚……」

「見るだけで苛ついたんで狩つてたら、自然と就職内定が決まつてたんス」

『……お前、どういう人生を……』

雄都が右の拳を突き出す。

その動きに応じ、ヘラクレスもまた「地球を守るために勇気を出した『素人』を突き殺した」、その右腕を突き出す。

戦いの終わりと同時にヘラクレスは消え、拳を突き出した雄都とコエムシだけが、誰も居ない海辺に残される。

「知ってるつスか? 格闘技経験者は、パンピーに手を上げちゃいけないんスよ、絶対に」

その言葉に込められた言葉が“自嘲”であると、コエムシは理解していた。

その日、コエムシは姿を消しながら、登校途中の雄都を見守っていた。

コエムシはその役職に与えられた力の関係上、その地球に課せられた戦闘回数に最適な質と数の人そうじゆうしや間を見つけることも、操縦者を常時見張ることも容易に行える。

コエムシが見守る中、雄都は学び舎に登校し、誰も居ない教室で勉強していた尊と会っていた。

「おはよー、ふっふーん」

「おはよっス、ミコ」

早朝の時間帯、二人だけの空気が出来る。

二人はクラスメイトであると同時に、小学校からの付き合いだった。

オト、ミコ、と気安く呼び合っているのがその証拠。

もつとも、二人にはそれだけでない繋がりがあるのだが。

「また自習っスか？」

「最近、色々あったからね。」

あんな大きなものが暴れてるんじゃ、いつもの私を維持しようにもできないもの」

ロボットが頻出し、この島が危険になっても。

観光客の急増・島から出て行く人間の急増で、島の顔ぶれが一気に変わっていった。

避難の繰り返しとその準備で、自分の時間が削られに削られても。

日ノ本尊は、自分で自分に定めた”この期間にこの量の学問を修める”という目標を揺らがせていなかった。

カリキュラムが遅れ、皆が遅れる授業に何も感じていない中、尊は一人自習を繰り返している。

「んなことやらなくていいと思うんすけどねえ。」

出されてない宿題やるようなもんじゃないっすか？」

「勉強は自分で決めて始めたものよ。学校も望んで学ぶために来ている場所。」

”これだけやる”と定めた目標を達成することは、ただの最低条件じゃないかしら」

「中学校でそういう風に言う奴、オレは初めて見たっす」

ちよつと意識が強すぎやしないだろうか、と雄都は密かに戦慄する。

意識が高いのではない。意識が強いのだ。

周囲に影響されない、苦を苦と感じない異様なストイックさが目に見える。

「オトにだつて、自分の中に譲れない『最低条件』はあるでしょ？」

「オレに？」

「でなければ、あの時私を助けてくれるわけがないもの」

「……」

雄都は”何のことを言っているのか分からない”といった感じの顔を意図して作り、感情を隠し、すつとぼける。

「あれ、もしかして覚えてない？」

「……話が抽象的すぎて、どれのこと言ってるのか分からねっすよ」

「ふっふーん……そうなの？ 分かかって誤魔化してるとかじゃなくて？」

「なんで誤魔化す必要があるんすか」

長い黒髪をさらりと流して、尊は首をかしげる。

そしてニカツと笑い、髪をばつとかき上げて、芝居がかった口調で語り始める。

「小学校にて繰り広げられるいじめ。」

男女の中でも特に力自慢な者達が集まったいじめ集団。

彼らは悪意なくいじめを始めます。狙われたのは、何も悪いことはしていない、穏やかな子」

たたん、と尊が教室の床を踏む音が心地いい。

窓から差し込む朝日が、尊の横顔を照らす。

舞台の上で物語を語るかのように言葉を紡ぐ彼女は、どこか楽しそうですらあった。

「日ノ本尊はいじめられた子を庇います。」

しかし身の程知らずなこの少女には、力も、頭も、話術もありませんでした。

何もできず、いじめられていた子を守ることもできず、暴力を振るわれそうになった、その時」

尊は雄都の目の前にまで歩み寄り、その両肩に両の手を置く。

「ヒーローが、現れた」

ぽんぽんとその肩を叩き、くるりと回って背を向けて、腰の後ろで手を組む尊。

「私を守ってくれた」

その背中を見て、雄都は罪悪感を覚える。

『男は女を守るもんなんだ』って！ あの時あなた、私の知る誰よりもカッコ良かった！」

胸に手を当て、尊は断言する。

反論を許さない語調で、断言する。

「あなたは私のヒーローなのよ。古今東西、未来永劫、たった一人の」

「……」  
こどもストレートに気持ちをぶつけられると、さしもの雄都もたじろいでしまう。

「ヒーローの隣に立つ人間には相応の能力が必要なもの。頑張って、バチは当たらないわ」

「持ち上げすぎっスよ」

「持ち上げすぎかどうかを決めるのは、私よ」

彼女のストイックさの源泉を見て、雄都は罪悪感を覚える。

やがてクラスメイト達も続々と登校して来て、二人が二人だけで話せる時間は終わってしまう。

(……違う……違うんだ……)

昼休みになっても、その罪悪感はいこりのように胸の内に残ってい

た。

昼休みに休息をかつこんで、いつものように話しかけて来る尊から逃げるように、雄都は屋上に居た。屋上が立ち入り禁止になっていない辺りが、田舎な島の学校らしい。

『慕われているではないか』

「……コエムシ」

『我輩、ちよつと内緒の恋バナも好きだぞ』

「なんで並の中学生では拮抗できない中学生女子力を急に発揮してくるんすか……？」

すつと現れたコエムシが、他人の恋バナには興味あるくせに恋人が出来たことはない、好奇心で他人の恋路を時たま崩壊させる中学生女子のような絡み方をしてくる。

尊と雄都の仲を邪推しているのだろうか。

「そういうのじゃないっすよ」

『違う、真偽はどうでもいいのだ。そういうことをきやつきや話すのが楽しいのだよ』

「中学生女子力をビンビン感じるっすね」

ちよつと違和感があるくらい、今日のコエムシの絡み方は俗っぽさがあつた。

「でもあんまおふざけが続くと、流石にコエムシの言うことでも無視するっすよ」

『我輩の声無視か』

「……」

『……今のは正直すまなかつた。オッサンのおちやめと思つて、許してくれ』

今日のコエムシは、どうにも変だ。

どこか無理矢理に空気を明るくしようとしている様子が見える。

その理由が、雄都には痛いくらいに分かつた。

「無理に明るくしようとしなかつたっていいっす」



『……オト』

「あなたのキャラじゃないっスよ。」

励ましてくれてるのは分かるっス。だから……いつも通りで、いっス」

『逆に、気を遣わせてしまったな……すまない』

七体目の戦いが終わり、もう一ヶ月が経とうとしている。

そろそろ八体目との戦いも始まるだろう。

その戦いが終われば、雄都の命の8/12が使い切られたことになる。

命の刻限が、迫って来ている。

コエムシは雄都を気遣ったのだ。

せめて、暗い空気にはしないようにと。

せめて、無念のままに死なぬようにと。

彼なりに考え、雄都に振る話題を選んでいたのだ。それにしたって、ふざけすぎだが。

(次に勝てば残り、1/3……)

雄都は叫び出しそうになる気持ちを、ぎゅつと閉じた口元で止め、そのまま飲み込む。

『その……なんだ、心残りはないのか。』

我輩達の時の地球では、女に別れを告げて逝った男が居たが』

「だーかーらー、ミコはそういうのじゃないっす」

『だがお前は、あの子を特に守ろうとしていたのではないか』

コエムシから見ても、雄都は尊に”特別な感情”を持っているように見えた。

それは尊が雄都に向ける分かりやすい”特別な感情”とは違うように見えたが、雄都が尊を特別扱いし、他の誰よりも守ろうとしていることは事実である。

「オレは価値のある人間を守って、今度こそ証明しないといけないんスよ」

『……価値？ 証明？』

「コエムシはさっきの会話も覗いてたと思うので、その前提で話すっ

ス。

あのいじめ、オレは一回ミコを庇っただけっス。

いじめを終わらせたのはミコっスよ。

いじめてた奴も、いじめられてた奴も、まとめて友達にして謝らせて和解させたんス」

『……それは、すごいな……』

雄都は力で結果を出した。

尊は言葉で結果を出した。

雄都は一度だけ、振り下ろされた拳から尊を守った。

尊は力ではなく、人と向き合うことで他人を守った。

だからこそ、雄都は尊を”価値のある人間”として定義する。

「ヒーローだなんて、とんでもない」

雄都は遠くを見るような目で、自分が生まれるよりも前くらいの遠くを見ながら、呟く。

「自分の事しか考えてない、暴力を振るう事しかできない、そんなオレはヒーローには程遠い」

コエムシは、雄都と初めて会った日のことを思い出した。

一つ前の地球を守ったヘラクレス、最後の操縦者・ココペリ、前の地球の人間でありながら次の地球の人間のサポートをするコエムシ。

三者は雄都の前に現れ、十二の命を持つ彼に全てを話した。

12の命を持つ彼は、操縦者の変更がしにくいという欠点こそあるものの、この戦いで生まれる犠牲を最小限に抑えられるかもしれない、理想の操縦者であったからだ。

”自分以外の人間の死を前提に、死の運命を免れる”という選択もあった。

普通の人間ならば、まずそちらを選ぶ。

けれども雄都は、”一人で十二回死んでいく”道を選んだ。

その時はコエムシも実感できなかったものが、今、コエムシの心にさざ波を立てている。

『お前、最初の人生で、何が……』

雄都の内側にコエムシが踏み込もうとした、その時。

世界が揺れた。

「まさか『敵』!? このタイミングで!？」

戦いの前兆。それを感じ、雄都は屋上で走り出す。

「コエムシー!」

『問題ない、行けるぞ!』

右足は屋上の床を蹴り、体を跳ね上げる。

左足は屋上の手すりを蹴り、更に体を跳ね上げる。

特に要らない三步目で、空を蹴った。

「来いッ!」

叫ぶ。

「——へラクレスッ!」

雄都の叫び、へラクレスの召喚、コエムシによる雄都のコクピット転送、八体目の敵の出現が、同時に行われる。

小さな島の街の中で、へラクレスは自分よりもずっと人型に近い『敵』と対峙した。

八体目。

雄都は油断なく敵の動きを観察しながら、街から海へと敵を誘導していく。

敵は特に攻撃もせず、誘導されるがままに、海へと移動していた。

『敵は街中での戦いは選ばない、か』

コエムシはほっと息を吐いた。

今日まで戦ってきた七体の中には、雄都が住む街に破壊行動を行い、それによりへラクレスの行動を制限しようとする者も居たのだ。

無論、その全てが雄都によって阻止され瞬時に血祭りに上げられたのは言うまでもない。

コエムシはそれに安堵したが、雄都は敵の動きを見て、その警戒心を引き上げる。

「あの動き……ヤバいっスね。プロッス」

『何?』

ジャブにもならない攻撃の応酬で、互いの技量を測る小手調べが始まった。

敵はヘラクレスの物理攻撃範囲ギリギリを見切り、そこから踏み込んで殴っては、そこから下がって回避もする。

ヘラクレスがレーザーを撃たんとすれば、カメラアイにてその前兆を見て取り、レーザーの直線軌道を避けて回避する。

攻撃パターンも多様で、実に読みづらい。

まだ本格的に接近戦はしていないが、そうならば打・投・極・組のどれも高レベルであることは目に見えていた。

「プロの、格闘家っス……」

プロ相手には負ける、と言ったのは雄都本人だ。

『前に我輩が言ったことを覚えているか？』

この戦いに用いられるロボットは若い命を吸った時の方が強い。

魂が若ければ若いほど、出力が上がるのだ。

敵が熟練のプロであるのなら、相応の年齢のはずだ。出力は相対的に下がる』

「なるほど」

ロボットは、生命力を吸って動く。

その際、魂が若ければ若いほど出力は高くなる。

原理は分からないがそうであると、このコエムシは前のコエムシから教えられていた。

「オレが本物の十代なら、それも励ましになったんすけどね！」

前世で二十代、今生で中学二年生。

” 敵と自分のどちらが若いのか ” も分からぬまま、雄都は敵に襲いかかった。

呆然としながら、雄都はヘラクレスの動きを止め、佇んでいた。  
真昼間の陽光がヘラクレスを照らし、海面に大きな影を形作っている。

『雄都、お前……ずっと最初の戦闘と同じ感覚で、戦っていたな』  
「……え？」

『ヘラクレスは、ずっとこの出力だったのだ。お前が、出せていなかっただけで』

「そんな……」

雄都は今回の敵に、完全に技量負けしていた。

このままでは負ける。この星の、この世界の全ての命と一緒に、死ぬ。

そう思った瞬間、雄都は理性を捨てて獣のような戦いを始めた。

全ての技を捨てて、力任せに。

「なんだ、これ……」

”苦戦すらしなかった”。

『狂戦士』と化したヘラクレスは、敵を力任せに押し潰し、蹂躪する。勝利の実感を感じられないほどに圧倒的に、雄都は勝ってしまった。いた。

『……覚えているか、雄都。』

魂の構造と、生まれ変わりの話を』

「え、あ、ああ、覚えてるっす。

魂は構造からして、何億分の一かって確率で生まれ変わる可能性がある、って話っすよね」

『そうだ。生まれ変わり自体は有り得る話なのだ。』

生まれ変われば、魂の若さもりセットされる。

お前が特別なのは、生まれ変わったからではなく、その後が付随したその力にある』

雄都に限らず、人の魂は何億分の一かという確率で、生まれ変わる形を形成する。

つまり雄都という人間は、宇宙でも希少な”生まれ変われる魂の形”をしているということ。

そこに、11回の蘇生権が加わると、どうなるのか？

『お前は生まれ変わった。』

そして12の命によって、11回”死んで生まれる”権利を持つて

いる』

雄都の”魂の年齢”を計ったコエムシは、ここでそれを理解した。

『お前は蘇生するたびに、魂の年齢がリセットされているのだ』

「……え？」

『気付くべきだった。』

お前のその、力と直結した魂の歪な構造に。

今日まで精査もしていなかった自分が恥ずかしい』

雄都の魂は、死ぬたびに誕生しているのだということに。

『本来ならば、操縦者が若ければ若いほど出力は上がる。』

しかし操縦者が若ければ若いほどデメリットも増えていく。

本来ならば両者は反比例の関係にあった。

だが、お前は違う。

橘雄都は、鍛え上げた武技と、0歳の若さから来る出力を両立しているのだ』

例えば、それぞれの地球における操縦者とロボットの基礎ステータスを力や速さに分け、アルファベットにて表記するとする。

B C C B B だとか、B C A C E だとか、D C C B E だとか、C E B B D といった感じにアルファベットは並ぶだろう。

しかし今のヘラクレスはおそらくA + A A B A といったありえない高さであり、その気になればまだ上がりかねない。

”理性ある狂戦士”。

先程までの、雄都とヘラクレスによる戦いを言葉にするなら、これ以外ありえないだろう。

『だが、朗報だ。もう油断しなければ、お前が負けることはないだろう』

「確かにそうっすね」

コエムシの表情は分からないが、声が少し嬉しそうな、そんなニユアンスを含んでいた。

雄都もどこかほっとしたような、緊張感が抜けた表情をしている。

(そうだ……明日からは楽に……)

明日からは負ける要素がない、と雄都が安堵した、その時。

彼の思考が停止する。

”互いの地球の命運をかけて戦う”という要素が、もうほとんど消失してしまっているという、その事実気付いてしまったがために。

(……まるで、一方的な虐殺だ)

明日から雄都の戦いは、決闘ではなく虐殺に近いものになるだろう。

自分が死ぬ可能性はなく、敵を皆殺しにするまで終わらない戦いを、虐殺以外の何と言うのか。

互いに自分の命と自分の世界の命運を懸けているという、一種の公平感もう消え失せた。

適当にやったとしても、もう負ける可能性はない。

勝てる可能性があると感じている、どこかの地球を守ろうとする戦士達を、雄都は明日から圧倒的な力で『苦勞もせずに』蹂躪していくのだろう。

そして、単純作業のように何も感じぬまま、単純作業に感じる気持ち以上の何の気持ちも感じられないまま、他の世界とそこに生きる命を押し潰していくのだ。

圧倒的な力に何の意味があるのだろう。

一方的な蹂躪に何の意味があるのだろう。

そんなものがあつたところで、この残酷はなくなりほしくないというのに。

雄都は自分に技で勝っていた相手の残骸を、自分が機体の力任せに叩き潰してしまつた敵の残骸を見下ろし、虚しさを噛み締める。

(勝つて、よかつたのか……?)

道から外れて、ボクシングを途中で放り出したオレが……

その道を外れず、ちゃんと懸命に歩いてきたであろう、人に……)

その残骸が、明日からの不公平な蹂躪を暗示しているかのようで。

(いや、勝つてよかつたんだ……でなければ、この星も、ミコも……)

雄都はこれから不公平に、理不尽に、圧倒的な力に叩き潰される地球の者達の気持ちを想い、自分がどれだけ残酷なことをするのかを自覚し、歯を強く食いしばつた。

雄都の心に救いはない。

けれども、彼の心を救おうとする者は居る。

たとえば……雄都を戦う時もそうでない時も見守っている、コエムシとか。

『教えてもらうぞ。お前の前世のことを』

「えええ……教えなくたって問題なく戦えるじゃないっすかー」

お前のためでもある、という言葉をコエムシはぐっと堪えた。

”事実であつてもそれを言ったら関係がどうしようもなくなつてしまふ”という一言はある。

コエムシは言葉を選びながら、雄都に話しかけ続けた。

『お前には言っていないが、この世界の戦いの勝敗は我輩達にも影響がある。』

この地球が他の地球に勝利した数が、我輩達の世界にも利をもたらすのだ。

具体的に言えば、我輩の世界が減じる可能性が減る。

前の地球の人間がコエムシとなって次の地球を手助けするには、そういう理由がある』

「え、そうだったんすか？ 初耳っすよ」

『言えばお前は、気負いすぎると思ったのでな』

雄都のため、ではなく。コエムシの地球のため、という言い草を選ぶ。

『お前の勝敗は、我輩達の地球とも無関係ではないのだ。』

不安は出来る限り取り除いておきたい。隠すほどの話ではないの  
だろう？』

「ま、そーなんすけどね」

雄都はコエムシに気を許していたからか、あるいは本当に隠すほど



の過去話ではなかったのか、あるいは死を前にして自分のことを誰かに聞いて欲しかったのか。

前世の終わり際の話、コエムシに語り始めた。

「聞いてても面白くはないっスよ。ただのボクサー崩れの人生なんて」

『ボクサー崩れ？』

「バカだったんスよ。」

女の人のピンチ！

男が集団で連れ去ってる！

プロになったばかりだけどオレが！

期待の新星とか呼ばれてるオレが！ 助けるんだ！

……なーんて、調子に乗って。バカはバカらしく、相応の結末を迎えたっス」

それは正義感であり、人情であり、使命感であり、人を助けようとする優しさだった。

しかし調子に乗っていたことも、また確かなことで。

最初の人生における雄都は報われず、『人助けの報い』を受けた。

「気付いたらオレは、鬱憤晴らしに一般人をボコった外道になったっス。」

襲われてた女性は居なかったことになっていた。

男達は善良な一般市民ということになっていた。

アザもつけてないのに、医者も男達の骨が折れてるだの内臓が傷付いたのだの。

記事を書いた記者といい、この捏造に何人関わってたのか結局は分からなかったっス。

ライバルジムの陰謀だったってことだけは、後々分かったんスけどね」

『……なっ』

「一度火が着けば大炎上。」

グルじゃない人間も煽り立てて大興奮。

傲慢じゃないっすが、若手では強くて有名な方だったっスからね。

ボクシング界に二度と戻れなくなるくらいには、叩かれた覚えがあるっスよ」

人を助けるために自分が愛した格闘技を使い、愛した格闘技の世界から追放された。

「んで、転がり落ちて転がり落ちて夜の街。

ボクシングが忘れられなくて、喧嘩売られたらすぐ買って。

落ちて墜ちて墜ちてった先でよりもよって、ヤクザの用心棒っス」

『……っ』

「バカっスよねー。

ボクシングしかやって来なかったから、職も見つけらんなかったんスよ。

勉強とかも全然してなくて、落ちぶれてからようやく色々気付いたっス。

オレ、学生の頃から好きなことしかしてなかったんだ、って。

だからボクシングが無くなったオレに、何の価値も無いのは当たり前なんだ、って」

雄都は尊を”価値のある人間”と言った。

それは逆説的に言えば、”価値の無い人間”を知っているということ。

「だから最後は、仲間にも盾にされた。

ヤクザが撃った銃弾が胸にズドン、ってね。

価値が無い人間は、そりゃ盾くらいにしか使えないよな」

そうして彼は死んだのだ。

そうして彼は生まれ変わった。

そうして彼はここに居る。

『何故……何故、そうやって死んで、他人を守る道を選んだ……？』

そんな人生を生きた後で、何故”女を守ろう”と……他人を守ろうと、思えるのだ……？』

コエムシには分からなかった。そんな人生を生きた人間が、こんな風に生きている理由が。

「オレは、今でも信じたいと思ってる」

『何をだ』

「女の人を助けようとしたあの時のオレの選択は、間違いなんかじゃなかったんだって」

『――』

「たとえば、結果がどうなるのだとしても。

人を助けようとする選択は、間違いなんかじゃないんだって、信じたいと思ってる」

あの時の後悔を抱えたまま、あの時の後悔を塗り潰すように、彼は戦い続ける。

女を守ろうとして全てに裏切られ、全てを失った記憶を抱えながら。

女を守ろうという気持ちを幼少期から抱え続け、一貫させている。

「オレは証明したい。」

この世界は、人が生きる世界は……

人を助ける人間が必ずバカを見る世界なんかじゃないんだって、証明したい。

世界はそんな残酷じゃないんだって、もっといいものだって、証明したいんだ」

”信じたい”という言葉と同じ意味合いで、雄都は”証明したい”という言葉を使う。

「悪かったのはオレをハメたやつと、巡り合わせと、オレの運だ。

人助けが悪い結果に繋がることなんて滅多にないって、証明したい。

オレが生きた世界じゃないどこか、平行世界のどこかには……

あの時オレが何事もなく助けて、”ありがとう”と言われて、それで終わる世界だって、きつと」

きつと、あるはず。

「きつと――」

橘雄都は、”価値のある人間を守って、今度こそ証明しないといけない”と言った。

価値のある人間とは、日ノ本尊のことだろう。

証明は、”人を守ろうとすることが『正義』である証明”……といったところだろうか。

ちっぽけな正義だ。

けれども雄都は、この正義の味方として、今この瞬間を生きている。「……もしも世界が、人を助けようとした人間が、何もかも報われなくて当たり前な世界なら」

逆に言えば、世界がそんな正義も許さないくらいに残酷ならば。

「オレは、世界に生きていたくない」

彼はこの世界に生きている意味を、感じられなくなってしまう。

十二の命を持っていたとしても同じことだ。

人を守ることが間違っていないと証明できなければ、彼は十二個の命を全て自殺で使い切るだろう。

「コエムシ、約束しろ……約束して欲しいっス」

雄都は自分以外の人間が操縦者として死ぬ可能性を排除した。

戦う場所を選び、戦闘に誰も巻き込まずにここまでの戦いを越えて来た。

あと四戦。

四つの命を使い切った時、”それ”を証明できるのか……それは、雄都にすら分らないことだった。

雄都は世界と、尊を守り続ける。

あの時、女を守ろうとして、救いのない結末を迎えた過去を塗り替えるために。

それは尊に向ける個人的な感情よりもずっと大きなもので、尊をもし守れなかったなら、彼はその瞬間に心のバランスをも崩してしまうだろう。

「この世界でオレ以外の人間は、誰も犠牲にしないって」

『オト……』

死に怯えながら、生の中にある何かを証明しようとしている雄都を見て、コエムシは複雑な感情の入り混じった声を漏らす。

だがコエムシの返答は、口にされる前に遮られてしまった。

「！『敵』……！！」

九体目の出現。

雄都とコエムシは目を合わせ、同時に頷く。

二人は言葉を交わす時間も惜しんで、出現させたヘラクレスに搭乗した。

「敵は……」

九体目の敵は、まるで弓兵のようだった。

その体にいくつも接続された弓を引き絞り、地球を一周させようと思えばできそうなくらいの速度と勢いで、複数の弓矢を解き放つ。

その矢の着弾地点付近に、避難途中の日ノ本尊が居るのが、ヘラクレスの目には見えた。

「――！！」

雄都はヘラクレスを跳躍させ、尊を庇える位置の、誰も居ない地面に立つ。

そして、両の腕とそこに付属している刃を全力で振るった。

ボクシングの技を用いず、腕力任せにがむしゃらに振るうそれは、まるで暴風。

暴風を引き起こすヘラクレスは、まるで狂戦士のよう。

そうして全ての矢を海へと弾き、ヘラクレスはデフォルト装備のレーザーをチャージする。

「邪魔だツ！！」

『邪魔だツ！！』

そしてレーザーを束ね、九本のドラゴン型レーザーとして解き放つた。

レーザーは光速だ。

間に地殻があらうと貫通し、事前動作から予測しなければ回避はほぼ不可能。

当然ながら、それが着弾した敵機体は見るも無残な姿になっていた。

『オート！』

「分かってる！ まだやってない！」

雄都はヘラクレスを跳躍させる。

背中に”守ってくれてありがとう”といった声を受けながら、雄都は敵懐に飛び込んだ。

そして上半分が無くなって中が見えるようになった敵コクピットを、握り潰そうとする。

「トドつ、め——？」

握り潰そうとする。

握り潰そうとした。

握り潰せなかった。

「……み……」

雄都の思考に反応し、ヘラクレスが”検索対象”にモニターのピントを合わせる。

避難する者達に混じっている日ノ本尊が、そこに居た。

敵のコクピットの中の者達に混じっている日ノ本尊が、そこに居た。

日ノ本尊が、二人居る。

「……ミコ……？」

雄都がモニターの中の二箇所、視線を行ったり来たりさせるも、モニターに映る二人の尊は変わらずそこに居る。

『バカな……』

「コエ、ムシ……これは……」

『平行世界の同一人物など、めったにあるものではないはずだ！』

この戦いにおいて、戦いの組み合わせの問題上、ありえないはずだ！

同一人物が居る平行世界二つが選ばれ戦うことなど、めったに、めったに……！』

ああ、そうだとも。

平行世界同士が戦うのであれば、滅多にないことだが、こういうこともある。

敵の地球に日ノ本尊が生まれ、日ノ本尊として育ち、日ノ本尊としてロボットの操縦者に立候補し、日ノ本尊の地球を守る……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

う、ことが。

尊は操縦席に座ったまま、ヘラクレスを睨んでいる。

「ミコを……」

つまり、尊を雄都が殺さなければ、この戦いの勝利判定は得られない。  
い。

「ミコを殺さないと、オレ達の世界を守れない……?」

尊を守ると、雄都は誓った。

それは彼の前世が残した強烈な意志があったから。

……そして、一人の個人として、日ノ本尊という人間を尊敬し、好ましく思っていたから。

「そんな……そんなこと……」

手が震える。

殺せと念じれば、ヘラクレスは尊を殺すだろう。

神話の中のヘラクレスが、子供を殺した時と同じように。

地上から、尊がヘラクレスを見ていた。

コクピットから、尊がヘラクレスを見ていた。

モニター越しだと、それが二人の尊に見られているように見えて、

雄都の手は動かない。

「で……できる、わけ……!」

思考がグルグルぐるぐる回り、言葉や単語が浮かんでは消える。

敵。

自分。

尊。

世界。

敵の世界。

今日まで潰してきた他の世界。

殺した責任。

世界と一緒に生き残った責任。

前世の後悔。

未練。

執着。

助けたい。

守りたい。

救いたい。

殺さなければ。

殺さなければ。

本当は誰も殺したくない。

殺さなければ。

殺さなければ。

殺さなければ。

尊を殺したくない。

守ると誓ったのに。

48時間が過ぎれば二つの地球は終わる。

ズタボロな敵の機体はもうヘラクレスを倒せない。

ヘラクレスならトドメを刺せる。

殺せ。

殺せ。

殺せ。

今まで殺してきた責任を果たせ。

この世界に生きる人間として、この世界を守る義務を果たせ。

「……れ」

たったひとつの言葉だけを呟いて、雄都はヘラクレスの手を動かす。

飛び散る血潮。

死体になる尊。

消えていく星。

消滅する世界。

二人の尊に見つめられながら、雄都は尊を握り潰す。

「許してくれ」

雄都はコクピットの中で一人、涙を流しながら、絶叫した。



戦いが終わり、涙と声を出し尽くし、寝床で眠りに就いた雄都を見ながら、コエムシは謝る。

『すまぬ、オト』

コエムシに表情があつたなら、その顔は苦渋にまみれていたかもしれない。

『この星の人間が戦わなければならないのは、”引き継ぎ戦”を含めて13回。

……足らんだ。お前が全ての命を賭しても、誰か一人は犠牲になつてしまう』

涙を流せていたならば、その顔に涙が流れていたかもしれない。

『誰も犠牲にせず、自分だけを犠牲にしてこの星を守るといってお前の願いは、叶わない』

雄都に真実を話さなかったこと、今なお話せていないことを、コエムシは謝罪する。

『叶わないのだ……』

謝罪するコエムシの脳裏に浮かぶのは、ヘラクレスに乗せればとても強い戦士として戦ってくれそうな、雄都もよく知る、一人の少女の姿だった。

ら

十体目。

既に失われた九の命を、今失われていく一つの命を、残る二つの命を噛み締めながら、雄都はヘラクレスを走らせる。

しかし、今回の敵には全く追いつけていなかった。

「速い……！」

『速さ自体はヘラクレスとそこまで差はないが、ヘラクレスは海上をロクに進めん！』

敵は槍を持った青色の高速移動仕様機。

それだけでなく、陸海空の全てを”走る”機能を持っていた。

対しヘラクレスはと言えば、空どころか海でもロクに動けない。

海中では地上の1/10程度の速度にまで減速してしまうほどだ。

その上、敵は動きがかなり慎重だった。

ヒットが滅多にないヒット&アウェイを繰り返しており、ヘラクレスの攻撃が当たらない距離、レーザーなども当てにくい距離を維持している。

ヘラクレスは敵が近付いて来た時にカウンターを狙うしかない。

なのに敵は、ヘラクレスがカウンターを狙えないタイミングを狙ったり、ヘラクレスが島を庇わなければならぬタイミングを狙ってくる。

そして攻撃後、ヘラクレスに反撃される前にまた離脱するのだ。

ヘラクレスの頑丈さ故に決着は付いていないが、戦いは膠着状態に陥っていた。

敵は距離を詰めてからの槍投げで攻撃してくる。

槍が尽きた隙を狙えば、と一度は雄都も思ったが、あの槍は背中にストックされ六度までなら連続で投げても問題はないようだ。

距離を取られた時にリセットされることを考えれば、ここを突くのは現実的でないだろう。

『焦れるな……これで48時間をフルに使うタイプなら、後が厳しいぞ』

地球と地球の潰し合いは、48時間とリミットが設定されている。この設定を聞き、操縦者達が考えることは大抵二つだ。

”48時間しかない”。

もしくは、”48時間もある”。

前者はこの時間を利用する。大抵は勝利に繋がらない何かのために。

例えば世界の全てを憎んだ人間が、戦闘から逃亡して敵の星の街の中に逃げ込み、敵の操縦者から姿を隠して”敵操縦者を殺す”という勝利条件を誰も満たせなくすることで、二つの地球を両方消滅させようとするのか。

後者は戦闘時に48時間をフルに使う。

48時間絶えず攻め続ける、あるいは攻め続けているように見せかけることで、敵操縦者の体力と精神力を尽きさせるのだ。

今回ヘラクレスに挑んでいる『敵』は、露骨に後者だった。

そうして手を尽くしたところで、勝てる相手でもないのだが。

「なら、攻撃したくなるような隙を用意してやるだけのことっすよー」

ヘラクレスは雄都の指示に従い、装甲の一部と右腕をパージし、再接続する。

接続にエネルギーをだいぶ喰われたが、そこはヘラクレスの出力だ。何も問題にならない。

そうしてヘラクレスは、自分の右腕と装甲板で作り上げた、まるで岩から直接削り出したかのような形状の、切るのではなく叩き潰すための斧剣を左腕で振るう。

目に見えて、防御ではなく攻撃に偏らせた形態だった。

ヘラクレスの装甲が減ったため、敵の赤い槍がその体を貫ける状態になる。

しかしヘラクレスは雄都の反応速度と戦闘経験も合わさって、その斧剣を縦横無尽に振り回し、飛んで来る赤い槍の全てを叩き落としていく。

この距離からならば、槍の発射と着弾の間に時間の差が生じるために、対応できるのだ。

青色の敵が、今のヘラクレスに攻撃を叩き込む方法は一つ。接近し、槍の発射と着弾の時間差を極限まで削った槍の六連射を決めることだ。

青色の敵の操縦者には、今のヘラクレスが焦っているように見えただ。

防御を削って攻撃に偏らせたことといい、持久戦に焦り、勇み足を抑えきれずに攻めて来たように見えたのだ。

そう見えるような動きを、意図して雄都は演じていた。

先程まで、圧倒的な攻撃力と防御力を見せ、青色の敵の操縦者を絶望的な気持ちにしていたヘラクレス。そんなヘラクレスが見せた隙に、見せた勝機。

地獄に垂らされた一本の糸を見つけたような気持ちで、青色の敵はこれに食いついた。

青色の敵はヘラクレスに一気に接近し、その周囲を一瞬でぐるりと一周し、一周する間に六本の赤い槍を発射した。

槍は装甲の減ったヘラクレスの全身をくまなく突き刺し、突き刺し、突き刺し……けれども、コクピットだけは貫けなかった。

「かかった」

場所が分からないコクピットを貫ければ勝ちで、だからこそ全身をくまなく突き刺そうと考えた青い敵の思考は、雄都に完全に読みきられていた。

雄都はヘラクレスの機能を使い、360°からの攻撃全てを目視し、ヘラクレスの持つレーザー機能の全てを一点集中。一本の赤い槍を焼き尽くし、コクピットを守りきっていた。

赤い槍は、ヘラクレスの心臓部位コクピットだけは貫けない。

「これで、決めっ……げ、ぼっ」

『オト!?!』

ヘラクレスはそのまま、追撃に斧剣を振り上げる。

だが、振り下ろされない。

突如雄都が吐瀉物を嘔吐して、コクピットの中で倒れてしまったからだ。



た。

『や……やった、のか……？』

コエムシが声を漏らした直後、この地球の勝利判定が出る。

また100億の人間を殺し、命を殺した実感が、雄都を蝕む。

「げほっ、げほっ、がほっ、かつ、カツ、おぶえ、え、ッ……！」

もう胃液以外の何も出ないくらいに、雄都は吐いていた。

コクピットの中が汚れ、雄都のためにコエムシが吐瀉物を片付けつつ、新鮮な空気を入れる。

胃液は無色透明であるはずなのだが、今雄都が吐いている胃液には色があり、それがそのまま彼の体と心の状態を表しているかのようだ。

「はあ……はあ……ごめんっス、コエムシ。黙ってて」

『そうではない、そうではないのだ、謝って欲しいわけではないのだ……』

「……もうじき死ぬ奴に、気い使ったってしやあねえっスよ」

軽くて明るい印象を受けさせるための取り繕った話し方が、今は痛々しい。

「あと二回」

あと二回戦えば、彼の命はそこで尽きる。

「オレは、この命の役割を果たしきってみせるっス」

『オト……』

二人は帰路につき、無言のまま家に帰った。

コエムシが何度か話しかけるが、雄都はほとんど喋っていない。

『人間が美味しいものを食おうとするのは何故か。』

食べ過ぎなければ体にいいものを、美味しいと感じるように出来ているからだ。

人間は何故増えるのか。

子を成す行為に関連するものを、気持ちいいと感じるように出来ているからだ。

人は何故死を恐れるのか。

死に繋がるものの全てが、苦しく、痛く、耐え難いものに感じられ

るようになってくるからだ』

「……」

『神様とやらは上手く作ったものだ。』

オト、死を恐れていると知られることは恥ではない。

死の恐怖を抱え込むな。

もっと吐き出していいのだ。我輩が受け止めてやる』

コエムシが何度励ましても、雄都は曖昧に笑って、一言だけ言い、それで終わらせてしまう。

「ありがとう」

言葉が響いていない実感だけが、降り積もっていく。

家についてすぐ、雄都は食事も取らずシャワーだけ浴びて、自分の部屋に戻っていった。

食欲なんて、湧いて来るはずもなかった。

「ちよっと、一人にして欲しいっス」

『オト』

「大丈夫。オレは大丈夫っスよ」

コエムシに一人にしてもらい、雄都は布団の中で丸くなる。

頭の中に想いが浮かび上がっては消えて、彼の心はかき混ぜられていった。

死が迫る現実。

自分という存在の終わりの実感。  
人を殺した罪悪感。

他の世界を消滅させた自責の念。

日ノ本尊を握り潰して、殺した記憶。

（——ッ）

頭の中の想いに、押し潰されそうになる。

（オレは……オレは……オレは……オレは……オレは……オレは……オレは……オレは……）

就寝時、部屋の電気を消した後、夜の闇が雄都を包み込む。

この時間もまた、雄都の心を蝕む。

もう寝なければ限界だ、と軋みを上げている体と脳。

覚醒状態のまま、睡眠の邪魔をする思考と脳。

夜の闇の中、感じられる孤独。

このまま眠ってしまったら、闇に喰われてしまいそうだと雄都は怯える。

十度の死で、彼は知っているのだ。

死の直前に見る『闇』は、この夜の闇とどこか似ているのだということ。

いつしか微睡眠、彼は薄い眠りにつく。

小さな物音でも飛び起きるような浅い眠りだが、コエムシが雄都の部屋に余分な音が届かないように手を尽くしたため、彼の貴重な眠りは守られていた。

夢の風景は、雄都の二度目の人生の小学生だった頃を映し出す。

小学生の雄都が、いじめる子供達と、いじめられる子、その間に立ちはだかる少女を見ていた。

どこにもでもある形の教室、どこにでもある加虐の形。

”女を助ける”という行為自体に躊躇いがある雄都は、ただ見ているだけ。

他人事のような顔をしている雄都の視界の中で、子供達は徐々にヒートアップしていった。

「どけよー！」

「そーよー！」

「じゃまよー！」

「嫌だ！絶対にとかない！」

多勢に無勢。

それでも少女は手を大きく広げ、多勢に立ち向かい続けている。幼い子供特有の、意固地になって後に引けなくなったわけない。その目には、確かな信念があった。

「叩かれたら誰だって痛い！」

それを知ってるのなら！



叩くのも、叩かせるのも、させちゃいけないんだ！」

その言葉が。

周囲の全てと敵対しても、毅然としたその姿勢が。

揺らがぬ強い目が。

幼いその身に宿る、生来の強い在り方が。

迷いなく人を守る姿が。

”女を助ける”ことにトラウマを持っていた雄都に、この人生で初めての決断をさせた。

「これは間違ってることだから！ だから私は、間違ったことなんて絶対にさせない！」

「なんだと！」

カッとなった男の子が、少女に向けて拳を振り上げる。

少女が目を瞑る。

そこで雄都は割り込んで、男の子の拳を受け止めた。

「え？」

雄都は脅しに、男の子の眼前に寸止めの拳を放つ。

拳の速度も精度も大したものではなかったが、”人の顔を容赦なく殴ろうとした精神性”と、”顔に向けて放たれた拳”という二つの道が、男の子の心をポツキリ折っていた。

「ひゃ、ひゃうっ!？」

「今日はやめとくっスよ。オレ以外の誰かが他人を殴ったなら、オレもそいつを殴るっス」

雄都の参入に肝が冷えたのか、ヒートアップしていた子供達の間には戸惑いが広がる。

教室の外からは、先生が教室に近付く足音が聞こえて来る。

少女は雄都の背中を見ながら、雄都の背中に問いかけた。

「なんで……助けてくれたの？」

雄都はつまらなそうな顔で、”価値のある人間を守る”、”女を助ける”といった考えから助けた少女の声を、背中に受ける。

「男は女を守るもんなんだ」

そんな言葉が自分の口から出て来たことに、雄都自身が一番驚いていた。

日ノ本尊は夢を見る。

自己研鑽を始めるきっかけとなった、あの日のことを。

「これは間違ってることだから！ だから私は、間違ったことなんて絶対にさせない！」

「なんだとー！」

少しだけ心細かった。

けれど尊は、自分のこの行動が間違っているだなんて、思いたくなかった。

だから、迷いなく人を守るために体を張る。

男の子が拳を振り上げたのを見て、尊は覚悟を決めた。

痛みを覚悟し目を瞑った少女であったが……いつまで経っても、痛みが来ない。

恐る恐る目を開けると、そこには頼り甲斐のありそうな背中があった。

「えっ？」

尊を庇った少年は、尊と友達でも何でもない。

助ける義理などないはずなのに。

なのにその少年は尊を庇い、拳を男の子の鼻先に突き付け、暴力にまで発展したいじめを止めてみせた。

「ひゃ、ひゃうっ!?!」

「今日はやめとくっスよ。オレ以外の誰かが他人を殴ったなら、オレもそいつを殴るっス」

雄都が振るった拳が、”自分が殴られるかも”とこの場の全員の思考に過ぎらせ、冷静にさせる。

もう今日のところは全部うやむやになり、いじめが続行されることはないだろう。

顔も見えない雄都の背中に、その時、尊は見惚れていたのかもしれない。

「なんで……助けてくれたの?」

尊はその背中に問いかけた。

「男は女を守るもんなんだ」

古今東西、体を張って人を守り、“暴力”と言われることも覚悟で人を守ろうとする者が、何故人々に『ヒーロー』と呼ばれるのか。

この日、尊は心に沁みるように理解した。

彼女の目には、橘雄都が、理由もなく人を助けられる人間に見えたから。

そんな夢から、尊は目を覚ました。

「ふっふーん……いい夢見たなあ……」

楽しい記憶。

愛しい記憶。

誇らしい記憶。

それらを抱えて、尊は軽い足取りで登校を始める。

学校に行けばまた会える、だなんて思いながら。

「おはよ、オト」

「おはよーっス、ミコ」

そして、胸が高鳴っていることを自覚しながら、笑顔で雄都に朝の挨拶をしていた。

「宿題はやって来た?」

「そりや勿論っス。」

ミコはいい加減オレが宿題忘れて来るの期待すんのやめねっスカ……?」

「期待なんてしてないわよ」

「いやしてるっス。宿題見せたそうな顔毎回してるっス」

二人はなんてことのない言葉を交わしながら、自然と屋上へと足を運んでいた。

尊が話して、雄都が笑う。

雄都が話して、尊が笑う。

とりとめのない話が、雄都の心を蝕んでいた昏いものを、少しずつ溶かしてくれていた。

「ね、オト」

「なんスか？」

尊が雄都に話しかける。

けれど尊は何も言わず、雄都は首をかしげてしまう。

「……ね、オト」

「だからなんスか？」

二度目ともなると、雄都は首をかしげるだけでなく、違和感も抱く。

何か言いたいことがあるのに、言い出せないでいる様子の尊。

いつの間にか空気が、少し重くなっていた。

「オト」

「だから……」

「あのロボットに乗ってて、危なくないの？」

「――」

そうして。

尊は「最初から全部知っていた」ことを、雄都に明かした。

「本当は、ずっと知らないふりしてるつもりだったんだけど……」

でも最近のオト、隠してるんだろうけど、見るからに元気が無いから

「いつから……?」

「最初から。雄都が最初に、あのロボットに乗って私達を守ってくれた時から」

「……!」

「だって、戦い方があの時私を庇ってくれたオトそのものだったんだもの。」

人を守る時のロボットの背中が、オトが人を守ってる時の背中と似

てたんだもの」

「そんなちよつと、見ただけで？」

「見れば分かる。私には分かる。だってあなたは、私のヒーローなんだから」

「！」

尊は雄都を理解しているということを誇る。

それを誇らしく思い、誇らしそうに胸を張っている。

雄都を格好良いヒーローだと断じる今の尊は、疲弊し摩耗している雄都の目には、今の自分よりもずっと格好良く見えた。

「ずっと言いたかったんだ。ありがとう、オト。私達を守ってくれて」  
正体を隠し、誰にも賞賛されないままに世界を守るヒーローにとつて。

この世界を守るため、他の世界を苦悩しながら滅ぼすヒーローにとつて。

物語の終わりに、必ず死ぬ運命を押し付けられたヒーローにとつて。

その言葉は、これ以上ないくらいに最高の救いになった。

「守ってくれて、とっても嬉しかった」

「――」

その言葉で、二回の人生の全てが、過去の自分の選択の全てが、報われたような気がした。

(……………ミコ……………！)

人を守るといふ行為そのものへの肯定。

人を救った行為に対しての感謝。

前世で善行を悪行と捏造され”悪行の報い”を受けた雄都にとつて、”人を助けて報われた”に等しいこの感謝は、例えようもなく嬉しいものだった。

雄都はその嬉しさを、ぐつとこらえて飲み込んで、顔にも口にも出さないようにする。

この感謝だけで十分だった。

最後の最後まで、残りの短い人生を走り切れる気がした。

だから誤魔化そうとしたのだ。

橘雄都は、自分が死ぬ時は誰も悲しませず、生死定からぬまま、消えるように死にたかった。

「……なんのこつスか？」

たぶん錯覚とかそういうのつスよ。あんなロボットに乗る筋合い、オレには無——」

尊が自分の死を確信できないように、尊が自分の死に悲しまないように、雄都はこの世界を守るために命を使い切った後、誰にも死を気付けさせないまま自分の死体をコエムシに消してもらうつもりだった。その方針を、彼は無理に続けようとする。

確信に至った尊を、とぼけるだけで騙せるはずがないというのに。悪足掻きをしている雄都を、見ていられないとばかりに出て来たコエムシがたしなめる。

『話すべきだ、オト』

「！ コエムシ、ここであんたが出て来たら……」

「ぬ、ぬいぐるみが浮いて、喋ってる!?!」

コエムシの出現に、雄都と尊が驚く。

驚きの理由は、それぞれ違ったが。

『お前には理解者が必要だ。』

お前にとって大事な人で、お前が寄りかけられる、お前が内心を吐露できる人間が』

「何を……!」

『どの道、お前が全ての戦いを勝ち抜いたとしても』コエムシ役』は必要だ。

誰か一人は巻き込まなければならない。

この星の人間は一人、次の地球の人間を支えるナビゲーターにならねばならん』

「っ—」

コエムシ役は、この戦いで唯一ロボットに殺されないポジションだ。

安全と言えば安全であるし、酷な役目と言えば酷な役目でもある。

「コエムシは」次のコエムシ役」を引き合いに出し、雄都を支える人間として尊を据えようとしていた。支える人間が居なければ、あと二回の戦い、雄都の心が保つか怪しかったから。

「それでも、余計なお節介っスよ、コエムシ……」

『神は見る者によつて形を変える。』

そしてお前は”人の形をした光の渦”に見えたと言つたな。

ならばお前は、心の底では本当は、光を求めていたのではないのか』

「――」

『余計で構わん。その余計が、お前の光になつてくれるのならば』

コエムシの目的は二つ。

この地球を勝たせて、自分の地球の未来を少しでも良いものに変えること。

そしてもう一つ。

橘雄都に、せめて何か救いを与えること。

『まずは我輩から話そう、日ノ本尊。』

その次には雄都も全てを話すだろう。

お前には全てを知り、その上で雄都を支えてもらいたいと、我輩は思っている』

そのためならば、雄都の運命を知り、尊が絶望したとしても構わなかった。

その絶望を尊が乗り越え、雄都を孤独な戦いから救ってくれるのであれば、構わなかった。

全てを知つた尊は、驚愕した。

信じられないものを見るような目で、雄都とコエムシを交互に見ている。

声もどこか、震えているようだ。

「そ、そんなことって……！」

『事実だ』

現実を受け入れられない尊を、コエムシが断じる口調で切って捨てる。

「そうだ、わ、私が操縦者になれば……！」

『お前が操縦者になっても、操縦者になれるのはオトの全ての戦いが終わってからだ。』

オトが死ぬことは変わらない。変えられない。そこだけは、不動の事実なのだ』

「そん、な……そんな……」

尊が希望を探して、コエムシに何かを問う。

コエムシが極力感情を出さないように、それに答える。

そんな問答が何度も続いた。

十、二十と問答が繰り返されるたび、尊の内に絶望が募る。

尊が希望を思いついてはコエムシが否定する、どちらも得をしない問答の応酬。

いつしか尊は、何も口に出さないまま項垂れるようになっていた。

”こうすればオトは助かるんじゃないか”と尊が口に出し、コエムシが否定するという形から、尊が口に出す前に心の中で自ら否定する形になってしまっていた。

だが、尊の心は強い。

彼女はやがてその事実を心の中で消化し、雄都と目を合わせられるまでになっていた。

「ミコ」

「オト……」

「ちよつとだけ、弱音吐いていいっすか？」

「……いいよ」

雄都と目を合わせて、尊は気付く。

自分の本音を取り繕わなくなった雄都の様子は、酷いものだった。

憔悴して、疲弊して、摩耗していた。

笑顔で取り繕うのをやめた雄都は、目の下の隈や瘦けた頬がいつそ



う目につくようになってしまっていた。

弱々しく、痛々しい。

だからだろうか。隣に大慌てしている人間が居ると、かえって冷静になるように。

砕け散る寸前の砂の城に近い今の雄都を見て、尊は弱さを抑えて強く在ることを選べた。

「死ぬのが怖い。オレ、死ぬのが怖い。」

他にも色んな気持ちがあつて、だから戦えてるけど……オレは、死ぬのが怖い」

死を恐れながら、死を受け入れながら、雄都は尊に本音を漏らす。押し込んでいた本音が、ヒビだらけの器から漏れ出るように。

「いいよ」

「……ミニ」

「なら、もう、いいよ。頑張らなくていい。あなたはもう休んでいいって、私が言うわ」

尊はその本音を聞いて、雄都に『別の形の救い』を提示した。

「死にたくない人が自己犠牲にならないと続かない世界なんて、続く価値はない。」

少なくとも私はそう思う。

世界のために死ななくちゃいけない責任なんて、誰も持っていないはず！

ここで終わりにしよう！　そして残りの短い時間、好きに生きよう、ね？」

あとどのくらいの時間があるかは分からない。

けれど、十一体目の敵が現れるまでの時間と、十一体目が現れてから最高で48時間の間は、好きに生きることができるとははずだ。

尊はその時間を自分のために使えと、雄都に言う。

自分の死と、世界の滅亡を前提とした上で。

雄都はそれを聞き、静かな笑みを浮かべて、首を横に振った。

「ダメっス。却下っス」

「なんで！」

「君が死んでしまうから」

「――」

真つ直ぐに、伝えられる言葉。

「いいんすよ、これで。」

人生なんて本来一回こっきりなのに、その人生の後悔を無くす機会を貰えた。

それだけで十分過ぎるくらいに、幸福なはずっす。それに何より、君がこの世界に残る」

「……オト……オト……!」

もう雄都自身にも、自分を取り繕っている時の口調なのか、自分を取り繕う余裕も無くしている時の口調なのか、分からなくなっていた。

けれども、語る言葉は間違いなく本音であった。

「ミコ、一つ頼んでいいっすか?」

「何? なんでも、なんでも、オツケーって言うよ……?」

「オレのこと、覚えておいて欲しいっす。」

そして出来る限り長く生きていて欲しいっす。

君が生きていることが、オレが生きた証、オレが守るために戦った意味だから」

「――っ!」

たとえ、戦いの果てに雄都が死したとしても。残るものは、ゼロではない。

「君がオレを、ヒーローと呼んでくれるなら」

自分がヒーローになれない人間だと知っていても。雄都は、自分をヒーローだと呼んだ少女の気持ちに、自分らしく応える。

「せめて、ヒーローらしく死なせて欲しい」

「……う、あ……!」

そうして話に一区切りがつき、コエムシが現れる。

『……オト。すまない……すまない……!』

「分かってるっすよ、コエムシ。コエムシのせいじゃないっす」

『敵だっ……!』

「！ 待って雄都、行かないで！」  
敵の襲来。

十一度目の戦いが始まる。  
最初に十二個あつたはずの命の、十一個目を使い切る戦いが始まる。

服の裾を掴んで止めてくる尊の手を優しく外し、雄都はその手を握ってから、優しく諭す。

「行くさ。この道を行くって決めたんだ。

一度は進もうとした道を外れて、過去の自分の選択を疑ったオレだから……今度こそ」

力づくでも行かせない、と尊は雄都の手を強く握る。

「——オ——」

雄都の手を握り、雄都の名を呼びながら、尊がまばたきをしたその一瞬。

「——ト——」

その一瞬で、雄都はヘラクレスの中に転送される。

握っていた手の中から、雄都の体温が消えた。

尊は何も握っていない自分の手を見て、その手で顔を多い、泣きながらその場に崩れ落ちた。

十一体目の敵は、剣士とでも言うべき敵だった。

ヘラクレスの本来の出力に雄都が気付いていなければ、おそらくはその鎧のような装甲と剣のような武器に、真正面から力押しで破れていただろう。

雄都が操るヘラクレスは、そんな敵にすら反撃を許さず、両の腕の刃もどきを超高速で叩き付け続ける。

(オレは、幸せな奴だな。……できれば、長生きできてたら、もっとなんと幸せだったのに)

敵剣士は後方に跳躍し、その剣を振るう。

おそらくはそのロボの切り札なのだろう。ヘラクレスのレーザー

に似て非なるビームを、振るった剣の刃の部分から解き放った。

500mはあろうかというヘラクレスを飲み込み、決定的なダメージを与えるであろうそのビームを、雄都の速い対応とヘラクレスの跳躍力のコラボレーションが回避する。

(だけど、いい)

全てのステータスがずば抜けた理性ある狂戦士に、生半可な攻撃は通じない。

(これでいいんだ)

ヘラクレスは黄金の輝きを回避し、剣士の敵の脇に回って、その両手の刃状になっっている部分に更なる力を込める。

振り上げられた両腕から、斬撃とも打撃ともつかない乱舞が放たれた。

「――ヘラクレスは、強いな」

敵を圧倒しながら、雄都は今日まで一緒に戦ってくれた『仲間』を褒める。

そして心の中で感謝する。

機械は何も答えない。だが、こうして口にすることに意味があった。

「やっちまえ、ヘラクレス！」

叩き潰される剣士の機体。

消滅していくもう一つの地球。

一方的な蹂躪という形で、雄都の手の中に転がり込んで来た勝利。十一個目の勝利判定を、橘雄都は掴み取る。

橘雄都の命の残数、残り一つ。

の

宇宙が幾多の並行世界を巻き込み、こんな風になる前のこと。

『神』『自然現象』『根源』と、様々な宇宙で様々な呼び方をされるモノが、宇宙の可能性淘汰を始める前のこと。

どこかの宇宙、どこかの場所、いつかの時間で、老婆が最後の結界を破壊していた。

「みつけた……」

老婆は体の一部を機械に置換している。

それだけでなく、強い生命の一部を取り込んだであろう部分、高位の霊的存在を接いだ部分も目に見えていた。

自分で自分の体を改造した部分も、他人が老婆の体を欠損させたであろう部分も、ところどころにあるようだ。

老婆は病魔と老衰に蝕まれているようにも見えるが、それよりもずっと体の中身がボロボロな方が深刻で、それよりも更に魂がズタボロな方が深刻だった。

老婆が壊した結界の中心点には、魔法陣があった。

魔法陣の中心には、和服を着た女性のミイラ。

その手と一体化した黄金の杯は、古きモノでありながら今も変わらぬ輝きを保っている。

杯の中には、英霊十騎分はありそうな無色の魔力が満ち満ちていた。

それはどこかの世界、どこかの宇宙、どこかの地球で、どこかの誰かが作ったもの。

根源とも、「<sup>から</sup>」とも、地母神の母の具現化とも、聖杯とも呼ばれるもの。

根源の渦とも、その一部であるとも、それに接続するものとも呼ばれるもの。

けれども根源の渦そのものでないことは確かで、人が作ったものであることは間違いない。

「やっと……やっと……」

老婆は七騎の英霊と七人の魔術師を悪辣な手段で全て打倒し、ここ  
にようやくやって来た。

「あのひとに……もういちど……あいたい……」

けれども、老婆が求めたものに老婆が触れたその瞬間、老婆の命は  
燃え尽きる。

「……あい、し……て……」

人の願望をそのまま世界に形にするそれに、想いだけが届く。

死の直前の老婆の、擦り切れた想いだけが届く。

理性による理論立てられた願いではなく、ぼんやりとした想いだけ  
が届く。

”もう一度会いたい”という引力。

”そんな世界なんて要らない”という世界の選別方式。

その二つが、幾多の並行宇宙全てに闘争の運命を上塗りする。

そうして、特定の人間だけに向けられる神の<sup>ゴッド</sup><sub>ハンド</sub>見えざる手は、この宇  
宙に発現した。

『我輩達の世界には、”人理”という言葉がある。この世界には無い  
ようだが』

「人理?」

『人類をより長く、より確かに、より強く繁栄させる為の理……人類の  
航海図。』

これを我輩達の世界では人理と呼ぶ。人の理と書いて、人理だ』  
水平線が見える、小高い丘の上にある公園。

そこのベンチに座る雄都と、その肩に座るコエムシ。

『人類史には、礎と定められた人の理がある』

「素敵な言葉つスねえ」

『何故そういう風に言われるのか。』

仮にタイムマシンなどでこれを消せば、人類史が消えるからなの  
そうだ。

そして人類史が消えても、これを復旧させ守りきれば、蘇らせる  
ことができるからだとか』

二人はなんてことのない雑談を交わしていた。

少しだけ楽しい、心が大きく揺れることもない、ちよつとだけ救  
いがある、そんな会話の応酬。

『所詮実証などできない仮想理論だ。』

だがこれは、我輩達の世界にヘラクレスが来てから実証された』  
「え？」

『コエムシには、コエムシになった時にある程度宇宙の真理を知る  
権が与えられる。』

我輩達の世界に現れたコエムシは、こう語ったのだ。

この世界の空間には、かつて存在していたモノの履歴が刻まれて  
るのだと』

それはここではない世界、宇宙の話。

『もしもの、話だが』

どこか遠くの、ありえるかも分からない、夢見るような幻想の話。

『空間の履歴を辿り……』

既に失われた人類史を取り戻し……

この狂った、宇宙同士の潰し合いを無かった事にして……

全てを取り戻そうとする者達が、どこかの宇宙に居るとしたら……

人の理が継続されることを保証するような機関が、どこかに居て  
くれば』

「ファンタジーっスねえ。嫌いじゃないっスけど」

『だろう？ 我輩もこういうのは好きだ。』

救いがない現実の中で、なんとなく救いがあるような気になれる  
かな』

それは妄想や創作の類の話であった。

コエムシは思いついたことを適当に話しているだけで、雄都も真に  
受けて話に乗っているだけで、二人の話は雑談の域を出ていない。

けれども、話していて肩の荷が下りるような、気楽な雑談だった。「でもそういうの、オチは皆全てを忘れて平和に暮らしましたー。とかじゃないっスかね？ 忘れるのは、個人的にはあんま好きなっスガ」

『何、仮にそうなくても、我輩達は全てを忘れず、何かを覚えているだろう』

「どこで覚えてるっていうんスか？」

「コエムシが、ニツと笑う。」

『魂にだ』

雄都もまた、ニツと笑う。

「いいっスね。宇宙がどうなっても消えないもの。無くならないもの。大切なもの」

二人の会話は、死を覚悟した軍人の会話にどこか似ていた。

意味がなく、ちよつとした笑いがあつて、悲惨な現状に不釣り合いな楽観がある。

二人の会話は、明日に死線に投入されることを運命付けられた軍人が、空を見上げて語り合う光景にどこか似ていた。

ベンチに座る二人の視線の先で、水平線と太陽が交わっている。

「ん？」

早朝の静かな公園に、雄都のものではない足音が聞こえ始める。

雄都がそちらに目を向ければ、見慣れた少女が息を切らせて膝に手を付いていた。

「はあ……はあ……やつと見つけた……」

「……ミニコ」

「私を見てない所で死のうとするって、猫かあんたは……!」

雄都とコエムシは、最後の戦いの予感を胸に、早朝にこの公園にやって来ていた。

すぐに戦う場所を海に移せる位置であり、また、死の前に見るには最高と言っている景色を見ることが出来る場所でもある。

尊も嫌な予感を感じ、彼らを探していたようだ。

雄都達が黙って消えた分だけ探すのに苦労して、雄都達が戦いを始



める場所を合理的な思考で決めた分だけ早く見つかった、といったところだろうか。

「もう！ ホントにもう！」

「わ、悪かったっス、ミコ」

「今更私の目の前で死なないように、なんて気の遣い方しないでよ！」

ぷんすかしている尊に、愉快そうに笑うコエムシ、困った顔の雄都。

「……ちゃんと雄都が逝くのを看取って、ちゃんと泣いて、あなたの死を悲しむから……」

「ミコは本当に……良い奴っスねえ」

「良い奴なんかじゃない。でも、少しでも良い死に方をさせてあげた  
いって……思ってた……」

尊は泣きながらも、悲しみながらも、死んでいく雄都を見送る  
だろう。

少しでも雄都が満足して逝けるなら、そうするはずだ。

雄都はそんな尊を眩しいものを見るような目で見ながら、何故か  
徐々に赤くなっていく尊の顔を見て、不思議そうにする。

「……思ってた……」

「ミコっ」

「……思っ……思ってた……」

最初はほんのり赤かった。

十数秒経った頃には、ゆでダコのように真っ赤になっていた。

今や目がグルグル回っているような表情になっている。

見るからに正気ではない。

そして、頭に昇った血が、冷静さを失った尊を暴挙に走らせた。

「ミコ、ホントにどうし」

「ええい、ままよー」

立ち上がってミコの顔を覗き込む雄都。

だがそこで、ミコが突如踏み込み距離を詰めた。

触れ合いそうになる唇と唇。

尊の踏み込むタイミング、踏み込みの仕方、意識の隙間を突くやり  
方、どれも完璧と言っていていいものだった。

(回避ッ——！)

しかし雄都は、ボクシング特有のステップで軽やかに後退する。離れる唇と唇。

いかな尊と言えど、一人の力では彼から唇を奪うなど不可能であった。

そう、一人では。

雄都の後頭部が押される。後ろから押される。

コエムシだ、と気付けたのは、雄都の後ろに居るコエムシが見えていた尊だけだった。

(回避不可ッ——!?)

コエムシに後押しされた女の意地が、男の意地を貫いた。

触れ合う唇と唇。

尊の一つの人生、雄都の二つの人生において、初めてのキスだった。

「ふ、ふふふ、ふふ……」

「み、ミコ……」

「雄都がどうかは知らないけど！ 私のファーストキス叩き込んでやったあ！」

尊の顔は絵に描けないレベルの状態になっていた。

顔はリンゴのように真っ赤。

嬉しさと恥ずかしさで表情が定まっていない。

感極まったのか涙まで出ている。

声が裏返って、視線は泳いで、ちよつと息が荒い。

「あばばっばば、顔から火が出る火が出る」

「ミコ、ミコ？ 落ち着こう。一番困惑してるのはオレっス」

『いやあ、我輩が多分一番楽しんでるな』

「コエムシい……」

ジト目でコエムシを見る雄都の顔を引つ掴み、尊は自分の方に向けさせる。

彼女の顔は少し落ち着いた今もちよつと赤かったが、その目は真剣だった。

「ね、オト。これが私のファーストキス。そして、ラストキスにする」

「え？」

「もう誰にもキスしないって約束する。」

私はずっと、あなたを好きで居続ける。

たくさん考えたんだけど、これくらいしか私にはあげられるものがなかったから」

彼女なりの、雄都への手向け。

彼女なりの、世界を救って死ぬ英雄への報酬。

彼女なりの、感謝と恋を形にしたもの。

このキスを最初で最後のキスにして、この恋を最初で最後にする。そういう誓いを、彼女は橘雄都という一人の男に誓おうとしていた。

「手垢が付いてる話だけど、『永遠の愛』。これ、あげる」

「ミコ……」

「だから……」

ありきたりな話なら、ここで男は女の愛を受け止めて、死んでいくのだろうか。

ありきたりな話なら、そうして女は永遠の愛を誓って、一生貞操を守っていくのだろうか。

けれど、雄都はその選択肢を選ばなかった。

雄都は一世一代の告白をした尊に、“もう一度今度は自分から”キスをする。

「これで、ラストキスじゃなくなったな」

「……あ」

「ラストキスは、もっと君を大切にしてくれる伴侶ひとにあげなさい」

雄都は本音を語る時の口調で、尊を諭す。

尊は雄都に恋をしていた。

雄都が尊を一人の女として見ていたなら、尊に対しほんの少しでも独占欲に近いものを持っていたなら、彼は二度目のキスをしなかっただろう。

尊の最初で最後のキスという誓いを受け入れていただろう。

けれども彼は、彼女の最初で最後のキスという誓いを壊した。

それは、彼が尊を異性として愛していないということと、彼女を自分に縛り付けたくないと考えていることを、証明していた。

彼のキスは、尊の恋を突き放すためのキスだった。

「君はちゃんと幸せになるんだ。幸せになれなかった人の分まで」

” 幸せになれなかった人 ” とは、雄都が殺した者達のことか。

それとも、宇宙のどこかで今も潰し合いをしている者達のことか。

あるいは、この戦いとは無関係に地球のどこかで不幸になっている者達のことか。

もしかしたら、雄都自身のことなのかもしれない。

「っ……」

キスで振られて、尊は涙を溜めている。

雄都は慈しむような目で彼女を見てから、海を見た。

そこに現れる、十二体目の敵。

十二体目は朝日をバックに、その黄金の装甲を煌めかせていた。

「コエムシ」

『行くぞ。これがお前の、最後の戦いだ』

「そっすね。あと一つ、最後の命、最後の戦い!!」

叫び、召喚、転送、戦闘開始。

それら四つが同時に行われる。

「——来い、ヘラクレスッ!」

そうして、雄都とコエムシ”と尊”が、ヘラクレスのコクピットに乗り込んでいた。

「ミコが乗ってる!? コエムシ!」

『最後の戦いだけは同乗したい、と言われてな』

「あ、あはは……」

「なんだかなあ……」

雄都とヘラクレスに勝てる機体など、もはや存在自体がありえないだろう。

加え、このコクピットは機体に核の直撃を食らっても、そうは揺れないようになってる。

尊が一分一秒でも長く一緒に居たいと思うのも当然。

コエムシがそれを聞いてやろうと思うのも仕方ない。  
危険がない以上、自分が十分気を付けていればいいかと、雄都も  
渋々納得していた。

『この世界とその子を守ろうとしている時のお前が、負けるわけがな  
かろう』

「そういう言い方はいやらしいっすよ」

対峙する二機。

ヘラクレスの暗い配色の装甲が、敵の黄金の装甲と対比のようにな  
なっている。

「ここで、全てを終わらせるっす！」

そうして、雄都とヘラクレスは、最後の戦いに挑んだ。

雄都とヘラクレスに勝てる機体など、もはや存在自体がありえない  
だろう。

ありえない。

ありえない、はずだった。

存在するわけがなかった。

だが、十二体目の黄金の敵は、その”ありえない存在”だった。

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ！」

雄都が驚愕し、ヘラクレスを動かす。

ヘラクレスがその両腕を高速で振るい、飛んで来る武器を片っ端か  
ら叩き落としていた。

槍、剣、矢、鋸、鎌、鋸、槌、鋏、錐、珠、針、網、液、粒、鑪、鉋、  
螺、その他諸々。

武器はあまりにも多種多様で、一つ一つの数が圧倒的に多く、何故  
か空間から突如現れて射出されるという、おかしくも強烈な攻撃方法を  
構築していた。

その攻勢はまさしく羅刹。

通常の機体の持つ攻撃力の五倍以上の火力をゆうに発揮していた。ヘラクレスは距離を詰めようとするも、黄金の機体の背後の空間から射出される武器の嵐に、距離を詰めることができず、武器を叩き落とすことに専念せざるを得なかった。

唯一の救いは、雄都が選んだ位置取りだろうか。

黄金の敵は島を背後に立っている。

黄金の敵を挟んだ島の反対側に、ヘラクレスが立っている形になる。

ヘラクレスがどんなに攻撃を弾こうと、黄金の敵がどんなに武器を放とうと、島に流れ弾が行くことはない。

悪くない位置取りだった。

「あんだだけの数の武器、どっから取り出してるんスか!？」

だが、ヘラクレスが近付こうとしても近付けていない現状に変わりはない。

ヘラクレスはレーザーを放つが、あまりにも多い武器の弾幕に遮られてしまい、届かない。

空間から現れる武器の嵐は、雄都のヘラクレスという規格外ですら、防ぐのに精一杯になるほどの代物であった。

「ゴエムシ！ これはいったい何スか!？」

『素粒子セルの状態を書き換えているのか!？』

状態子にエネルギーをどれだけぶち込んでいるのだ……!？』

「分かるように説明頼むっス！」

『莫大なエネルギーを使い！ この場で武器を世界に投影して射出しているのだ!』』

この宇宙は、この地球の人類が理解していない法則性で出来ている。

例えば”素粒子セル”がそうだ。

この宇宙は現在の地球の科学力では観測できない、移動しない素粒子で満ちている。

移動していないこの素粒子に”情報”を叩き込み、この素粒子の状

態を変化させるのに必要なエネルギーを注ぎ込めば、その情報の通りの物質が形成されるのだ。

この十二体目の敵は、そうやって無数の武器を形成・射出して攻撃を仕掛けていた。

『だがそんなエネルギー、お前以上の出力が出せる”年齢”でもなければ不可能だ!』

「え? まさかオレと同じ境遇の操縦者なんスか?」

『……今さつき、敵の操縦席を見てきた。』

お前と同類とは思えない者が操縦していた。

操縦していたのは……お前と同類の人間ではなく、”妊婦”だった』

「に、妊婦?」

『最悪の仮説が立てられる。』

あの機体の出力は”胎児”の年齢を基準に捻出されているのだ。

0歳の赤子と比べても数ヶ月は若い、胎児の年齢を基準にな。

そしてその出力を使つて、母親の方がこの出力任せの操作をしているのだ』

「そんなことできるの!」

「そんなことできるんスか!」

『可能性は二つ。』

機体のバグ。

それか、向こうのコエムシが少し助力した。

おそらくはこのどちらかだろう……だが……だが!』

全ての妊婦ができるわけではない行為。

0歳以下の胎児と、成人の知能を併せ持つイレギュラー。

天文学的な確率でも発生しないような、奇跡の存在だった。

「仮にコエムシが力貸していたとして、そこまで力貸していいもんなんスか?」

『ルール違反ギリギリの助力行動だ! 我輩と同じくらいにはギリギリだ!』

コエムシが操縦者に協力できることは限られている。

ゲームのルール上、不公平さが生まれるからだ。  
そもそも他の地球の奴らなんか知ったことじゃない、と考えるコエムシも居る。

俺達の時と同じくらい他の地球の奴らも苦しめ、と考えるコエムシも居る。

コエムシの助力の可能性、という時点で相当に珍しいイレギュラーだった。

『なにより！ 分かってやっているのなら！ 人道的にはギリギリですらない！』

妊婦を使い捨ての最強戦士にする。

戦いが始まってから妊婦を操縦者にしたと仮定した場合、この策を考えた人間は、相当に合理性を優先する人間なのだろう。

偶然が重なってこうなったのなら、運命が非道であったと言う他無い。

『オトは一ヶ月前の戦いで死に、力で蘇生した。』

……ならば、年齢は一ヶ月扱いになるだろう。

基礎出力における優位は、これで消えたと考えていい』

「厄介、っスね！」

雄都は基礎出力の高さを全てロボの基礎スペック上昇にあてている。

敵は基礎出力の高さを武器の形成・射出に全てあてている。

そのため、雄都は高い近接戦闘能力を一方的に封じられ、黄金の敵が最大の力を発揮する状況を強制されてしまっていた。

この構図は、最強の剣と最強の銃が戦っている構図に等しい。

(どうにかして距離を……)

打開策を模索する雄都。

一方的に攻撃しつつ、付け入る隙を探す黄金の敵。

戦いは一方的な展開から膠着状態になるかと思われたが、やがて黄金の敵が思いつきのように、空間に浮いた武器の先を島に向ける。

(！)

雄都はその瞬間、敵の企みを理解する。



そして跳躍二回でくの字を描くように跳び、敵が武器の先を島に向けた次の瞬間には既に、黄金の敵と島の間を割って入っていた。

「っ！」

射出される無限にも思える数の武器の嵐。

ヘラクレスはそれら全てを弾き、島を守る。

「うおおおおおおおおおッ!!」

人を守る。

その時、一人の子供が、それを見ていた。

黄金の敵が放つ無数の武器。迫る脅威。武器の矛先が向かうは、子供が立っていたその場所。

そんな中、海面に大きな水飛沫を発生させながら、大きな影が現れる。

子供に向かって飛んで来た攻撃を全て弾いて、大きな影は仁王立ちした。

「わあーっ！ 見て、お母さん！」

子供は喜色満面の笑みで、ヘラクレスの巨体を指差し、嬉しそうな声を上げる。

「来てくれた！ 守ってくれてるよ！」

島の人々からは、ヘラクレスの背中しか見えない。

ヘラクレスを操っている雄都も見えない。

それでもなお、島の皆が雄都とヘラクレスに向ける感情は、守ってくれる者への信頼だった。

弾く。

弾く。

弾く。

黄金の敵が放つ武器の連射を、ヘラクレスは弾き続ける。

「ああああああっ！」

だがやがて、島を庇いながら戦うことに限界が来る。

装甲は片っ端から着弾の衝撃で剥がれていき、右腕も根本からもぎ取られてしまっていた。

「再接続！」

雄都は取れた右腕を左腕で持ち、取れた装甲を右腕を中心に再構築。

無骨な斧剣を作り上げ、それを全力で振るうことで敵の武具の連射を弾いた。

(受けに回っていれば、押し切られる！)

雄都はコクピット・走る足・武器を振るう左腕だけ守ればいい、残ればいとばかりに、被弾覚悟で突っ込んで行く。腰がちぎれる前にと、前へ、前へ。

狂戦士と称すべき狂気の突撃。

コクピットが露出してもなお止まらない。

だがその進撃も、ヘラクレスの体をぎしりと絡め取る鎖に止められてしまった。

「鎖!? こいつ次から次へと、思いつきの戦術を——」

『オート!』

「!」

何も無い空間から突如現れた鎖は、ヘラクレスの動きを完全に止めてしまう。

そこで敵は、その巨体に見合わない、人が使うようなサイズのワイヤーアンカーを射出した。

アンカーはコクピットに直撃し、コクピットの硬い殻を貫通し、その奥にまで伸びる。

「あ」

それが操縦者を殺す必殺の一撃であると、コクピットの殻を貫通されてから、彼らはようやく気付く。ワイヤーアンカーはコクピットの中の人間の心臓を、片っ端から挟むよう設定されていた。

まず向かうは、雄都の隣に立っていた尊。

その心臓を挟らんと、ワイヤーアンカーの先端が迫る。

（私、死——）

その瞬間。

どん、と尊は突き飛ばされた。

「……え」

尊を突き飛ばした雄都の心臓が、ワイヤーアンカーに挟り取られる。

誰がどう見たって答えは変わらないであろう、致命傷だった。

「く、う、かはっ……」

『オート！』

「オート！」

これで死ぬのか。

これで終わるのか。

これでこの地球は消えてしまうのか。

そう思われた、その瞬間。

雄都は尊の方に向かおうとするワイヤーアンカーを両の手でがっしりと掴み、腕に巻き付けて固定し、叫ぶ。

「——負あけえるうかああああッッッ!!」

その叫びに応じ、ヘラクレスが出力を引き上げる。

鎖が軋むも、鎖は砕けず千切れない。

「射殺せ、ヘラクレスッ！」

ヘラクレスの体から放たれる、九本のドラゴン型レーザー。

それが鎖を粉碎し、自分の体を守ろうとした黄金の敵周囲の武器ごとごとくを、吹き飛ばす。

レーザーによって切り開かれた道を、ヘラクレスが突き進んだ。

（オレは、人を守ることに正しさを証明したくて戦っていた。）

けれど本当は、この戦いは、正しきなんて掲げないで、生きるためだけに臨むべき戦いなんだ)

その胸の中に、心臓は無い。

『人を殺してはいけない』という当たり前の正義は、この戦いにはない)

けれども雄都は、精神力一つでこの世にしがみつき続ける。

だから、彼はまだ死んでいない。

だから、この戦いに勝利判定も敗北判定もまだ出ていない。

だから、まだ何も終わっていない。

(人を殺したくなくても、心を鬼てつにして戦わなければならない。

正義を捨てなければならない。

汚れたこの手で君を守るよと、この星のどこかに居る、守りたい誰かを思い浮かべながら……)

ヘラクレスがあと一歩で攻撃を届かせられる、そんな位置で、左腕に持った斧剣を掲げる。

(死が不可避であつても、自分の死の後に何かが残ると信じてるから、皆、戦ってる——)

心臓の無い胸を張り、口から血を吐きながら、雄都もまたその左腕を振り上げた。

「オト！」

尊の声が聞こえて、雄都は穏やかな笑みで振り返る。

「言ったよな、男は女を守るもんなんだって。」

——オレは、男だ。なら、お前は守らなくっちゃな」

そして前を見直して、剣を振るう。

「あああああああッ!!」

左腕一本で振るわれる斧剣。

すれ違いざまに放たれるは、超高速の九連斬撃。

それが十二体目の敵を切り刻み、粉碎し、それを黄金の屑へと還す。

一つの世界を消滅させて、雄都は最後の”勝利”を手に入れた。

「覚えておいてくれ。万人が、億人が、オレの人生をクソみたいなものだと笑っても」

「オレだけは、オレの二つの人生を誇ってる。

人を助けようとすることは、あの時のオレの選択は、間違いなんかじゃなかったんだ」

十二の戦いが終わって、少しの時間が経った後。

『オトは心臓を抉られてもなお、生き続けた。』

精神力のみで生き続けたのだ。

オトが死ねば、この地球は滅びる。それを知っていたために。

戦いが終わるまでの僅かな時間生きていれば、オトはヘラクレスに殺される。

そしてオトがヘラクレスに殺される対価として、この地球に勝利判定が与えられた』

コエムシは、日ノ本尊に静かに語りかけていた。

『オトは最後まで生きようとしていた。』

死ぬために戦っていたのではない。

その命を、この世界を救うために使い切るために、奴は生きようとしていたのだ』

「うん」

『我輩は奴に力を貸せたことを、誇りに思う』

二人はヘラクレスのкокピットの中に居た。

「ねえ、コエムシってどんなところに住んでたの？」

『うん？ 我輩の身の上話か……』

我輩は……そうだな、特別な専門学校のようなものの寮で暮らしていた。”時計塔”という』

「ふっふーん……」

『そこに入るには遺伝する貴重な才能が必要でな。』

我輩は突然変異でその才能を得た一人として、そこに籍を置いていた。

雄都に話した根源の話や人理の話は特殊なものだ。

その特別な専門学校でもなければ学べないような、特殊な分野の知識であった』

「へえー」

『そしてその時計塔という場所で、我輩達はヘラクレスに乗り世界を守るという契約をした』

コエムシはどこか懐かしそうに、しみじみと過去を語っていた。

『シロウ、リン、ルヴィア……』

フラット、スヴィン、ライネス、ロード・エルメロイⅡ世……

他にも、たくさんの方が居た。

皆、我輩の仲間達だった。皆、優秀な者達だった。

皆、何かの理由を抱えてヘラクレスに乗っていた……』

「……」

『皆、死んで行った。』

我輩は誓ったのだ。

彼らに恥じない生き方をしようと。

彼らが守ってくれたこの命は、価値のある使い方をすると』

コエムシが尊に近付き、尊がその右手でコエムシに触れると、コエムシがメガネをかけた男の姿に、尊がコエムシの姿に変わる。

「これで、我輩はコエムシではなくなった。次の地球ではココペリと名乗ろう」

『そして、私がコエムシ……だよな?』

「ああ。次の地球の者達を、よろしく頼むぞ」

元コエムシの現ココペリは、”十三回目”の戦いに操縦者として臨む。

十三回目の戦いは、引き継ぎ戦だ。次の地球の者達に、この戦いのことを教える戦いになる。

元尊の現コエムシは、次の地球の戦士達を支えるサポーターとなるだろう。

『コエム……じゃなかった。あなた、本当の名前は？』

「凡庸な名前さ」

尊であったコエムシに問われ、元コエムシは、自分の本当の名前を名乗った。

「我輩の名は、本田ほんだ護まもる」

少し躊躇い、その苗字と名前を名乗った。

「我が母、本田千鶴を泣かせることになる……ただの親不孝者だ」

故郷の地球に帰る権利を捨て、故郷の母に育ててくれたことへの感謝を告げる権利を捨て、故郷でもない地球のために死のうとしている自分に、その名を名乗る権利はないかもしれない、なんて思いながら。

コエムシになった尊は、次の地球に渡ってから数日で、ココペリとなった護の前に操縦者候補達を連れて来ていた。

「これなに？」

「うわすっげ」

「漫画みてー」

若い方が強くなる、という話は聞いていたので、尊が集めたのは子供が多かった。

彼女が同年代の子供が二十人以上と、その子供達の教師らしき男性が一人。

「随分と連れて来たな、コエムシ」

『オトは孤独に蝕まれてた。』

……だから、これがベストだと思う。孤独感だけは、排除できるはず』

「……まあ、どう転がるかは分からんか」

尊であったコエムシがこれだけの大人数を連れて来たのは、前回の

戦いで雄都がたった一人で戦っていた反動だろう。それが吉と出るか凶と出るかは、まだ分からない。

『ココペリ』

「これが、あやつに何もしてやれなかった……吾輩が取れる、唯一の責任だ」

『……』

「あの星を救い、この星を残し、あやつが生きた証を残そう」

『……今日まで、ありがとう』

「戦いに関する皆への説明は、頼んだぞ」

そうして、護はヘラクレスの操作を始める。

この機体をヘラクレスと名付けたのは、護の世界の人間だ。

護には、ヘラクレスというこの機体の呼称を、この世界の人間に伝える気は無かった。

皆が好きに呼べばいい、と考え呼称の継承をしようとしなない。

「あの、すみません……ココペリさん、でいいのでしょうか？」

「ああ、そう呼べ、教師の人」

「画楽と申します。」

子供達にはガラ先生と呼ばれていますね。

あの、これから何が始まるんでしょうか……？」

画楽と名乗った男性に、話しかけられるココペリ。

「あたし、町 洋子。ねね、お人形さん、あなたの名前は？」

『コエムシ。そう呼んで』

「これから何が始まるの？」

洋子と名乗った少女に、話しかけられるコエムシ。

ココペリとコエムシは声を揃えて、画楽と洋子の二人に返答を返す。

「戦いだ」

『戦いよ』

子供達の困惑が収まらないままに、戦いは始まった。

本田護が、雄都を死の運命に招いた責任を取ろうとする戦いが。

本田護が、死んで行った仲間達に胸を張るための戦いが。



本田護が、その命を使い切る戦いが。

(止まない雨はない。明けない夜はない。溶けない雪はない)  
護は雄都の真似をしてみようとするが、全くできないことに苦笑する。

ドラゴン型レーザーも出ない。

装甲と片腕を素材にして造る斧剣も無理だった。

ともかくにも出力が足らず、雄都という特別な命だったからこそ  
の技だったのだと、よく分かる。あの狂戦士じみたスペックも、まるで  
発現していなかった。

(いつかは春が来る。桜が咲く。全てが”めでたしめでたし”で終わる日は来る)

ココペリは人知れず笑い、今の自分が切れる手札で戦い始める。

(——そう信じて、今は戦おう)

きつと自分の死の後にも、何かは残るはずだと信じて。

その戦いを見ながら、尊だったコエムシは、胸の奥から湧き上がる  
気持ちを抑え込んでいた。

雄都が死んだ時から、ずっとある気持ち。

「あの人もう一度会いたい」。

「あの人が居ない世界に意味はあるのだろうか」。

そんな想いが、幾度となくコエムシの中に湧き上がる。

(私はもう一度、オトに……そうでなければ、世界なんて……)

橘雄都には素質があった。

死んで生まれ変わるための素質だ。

彼の魂の構造は、死ねば生まれ変わる構造になっている。

”死にたくない”という感情から十二の試練を得ることとは無関係に、彼は生まれ変わるのだ。

日ノ本尊には、素質があった。

最高の出会いがあり、最悪の巡り合わせがあれば、とびっきりの存在になる素質が。

そうでなくとも、歴史に名を残せるくらいの素質が。

具体的には、橘雄都と出会い、橘雄都と最悪の形で死別した場合、彼女はとびっきりの怪物に変貌する運命にある。

蛇の女神が、恐ろしい蛇の怪物に反転するように。

(……違う。私は、オトと約束したんだ。だから、変なことは考えちゃダメ)

しかしこの世界における日ノ本尊は、雄都に最後に言葉を残された。

そのため、彼女が堕ちることはない。

『あの人もう一度会いたい』という気持ちをこじらせることはなく、『あの人の居ない世界に価値はない』とこじらせることもない。

”もう一度会いたい” 気持ちだが、雄都の魂を根源に近いものに引き寄せる引力になることはない。

”オトが居ない世界に意味はない” という気持ちが、変な形で噛み合って、宇宙の淘汰と選別という現象に発展することはない。

少なくとも、この尊においては、そうはならない。

辿らなかった道筋がある。

この物語の日ノ本尊が成らなかった、未来の姿の可能性がある。

”理想を追ってしまった” 尊の、成れの果てがある。

恋を振り切れずに堕ちていった場合、日ノ本尊は世界の全てを変える存在になる。

(私は強く生きよう。胸の中に雄都との思い出を抱えて。幸せを、目指して)

この物語における日ノ本尊が、橘雄都に十二の命をもたらすことも、この宇宙に残酷な法則性をもたらすこともない。

そうならなかったことが、この物語における日ノ本尊の、何よりの救いになった。

戦いは続く。

ヘラクレスと呼ばれた機体はまた別の者の手に渡り、その地球で新たな呼び名を付けられる。

そしてまた、別の地球の未来を守るためにその力を振るう。

雄都の地球の未来も続く。

命を懸けて戦った雄都の想いを、皆知らぬままに。

滅びの運命を回避した地球は、その未来を繋げていく。

いつかのどこか、どこかの宇宙、宇宙のどこかで、また人から人へと戦う力が継承される。

「俺は衛宮し……ココペリだ。悪いな、ここからは俺も助けられないんだ。ここで死ぬから」

「オレは橘雄都っス。……謝らないで下さい。その気持ちだけで十分っス」

「何か困ったらあのコエムシって奴を頼ってくれ。俺の友達だから、信じられるのは保証する」

『……！』

「はいー！」

「忘れないでくれ」

何かの味方でもいい。誰かの味方でもいい。

残酷な戦いの中でも、自分が自分以外の味方をしてるってことを、忘れないでくれ」

こんな残酷の中であっても、人から人へ伝わるものはある。

星が滅んで、星の未来が守られた。

今日も、明日も、明後日も、きつと守られていく。

他の何かを踏みつけにしても、大切なものを守ろうとする誰かが居る限り。